

忠誠菊池小史

特233

338



始



特 233
338



菊池小史



忠臣義士の鑑



霜にかれせぬ白菊の

薫を世々にあらはして

君をまもりしますらをは

忠臣義士の鑑なり

金剛山下の楠木せん

いさを並べし菊池氏

たぐひまれなる勳功の

歴史かたらんいざ來れ

序

本校の生徒皆さん。本書は皆さんの爲に生れたものです。

二十四代五百年の長きに亘り、終始一貫せる菊池氏の誠忠の如きは、古今東西に之を求むるも其の例を見ざる所であります。

楠正成は御前會議に於て建武中興の功を論じ、武時公をもつて忠厚第一と推賞されました。慶應四年、太政官から肥後藩主に下された御沙汰書には「菊池氏之儀ハ曩祖武時以來累代 王室ニ勤勞シ其誠忠臣分之模範ニ相成候段兼々 御嘉尙被爲在」云々有難い御言葉があつてゐます。

私どもは斯かる光輝ある勤王家を我が郷土に於て仰ぐことを得、日々其の神靈にぬかづくことを得るは誠に光榮の限りです。

従つて菊池氏に對する熾烈なる尊崇の情を基調として忠孝の大道に進まんことは我が校教育の重點であります。抑々「知るは感ずるの基」と言ひます。私たちは菊池氏に就いて眞に感激し、眞に崇敬

二
するためには先づよく菊池氏を知らねばなりません。其の爲には教授、講話なき其の機會は少なくありませんが、更に一層其の知識を確實にせんが爲に本書を與へることにしました。學校の意圖に添はんが爲には皆さんの本書愛讀を切望します。

本書は専ら松蘭善兵衛先生の編纂に託したものであります。皆さんと共に先生の勞に感謝の意を表したいと思ひます。

昭和八年四月一日 校名改稱を祝しつゝ

熊本縣立菊池高等女學校長 橋 本 留 喜

目次

一、菊池氏歴代記

菊池氏の祖系	一代 則隆	菊池下向
	二代 經隆	
	三代 經賴	
	四代 經宗	
	五代 經直	
	六代 隆直	壇の浦波
	七代 隆定	
	八代 能隆	
	九代 隆泰	
	一〇代 武房	蒙古の嵐 赤星有隆の殊勳
	一一代 時隆	

一二代 武時 大智禪師 武時の擧兵 博多の合戦
 一三代 武重 箱根の先陣 菊池の千本槍 菊池武敏少貳貞經を誅す
 多々良濱の激戦 菊池氏の家憲

一四代 武士 武光と正觀寺 武光の隈府入城
 一五代 武光 征西將軍の宮の御下向及菊池御入場 菊池の固め十八外城
 良成親王の御下向 針摺原の激戦 北九州及日向征伐
 筑後の大會戰(大原の合戦) 太宰府の陥落と武光の卒去

一六代 武政 高良山の退陣 水島の快戦 矢部の御退隱
 一七代 武朝 託摩原に於ける菊池軍の奮戦 菊池の落城 武朝の卒去

一八代 兼朝 菊池氏の對外運動 玉祥寺と碧巖寺
 一九代 持朝 菊池文教の淵原
 二〇代 爲邦
 二一代 重朝

二二代 能運 島原落 米良の奥地へ
 二三代 政隆 阿蘇の嵐 久米原の戦
 二四代 武包 傳統二十四代四百六十三年

二、菊池神社記

別格官幣社菊池神社
 祭神累代の墳墓
 菊池氏の同姓異氏

三、菊池の史跡

菊池十八外城略圖
 官軍墓地
 内裏尾
 月見御殿址
 將軍木及松囃子

四、菊池氏系圖

九	袈	手	無	輪	菊	江	熊	菊	堂	馱	菊	隈
儀	袈	水	量	足	池	月	耳	池	山	護	の	部
山	尾	山	山	山	五	山	山	村	金	地	池	忠
大	山	南	西	東	山	玉	正	北	比	藏		直
琳	北	福	福	福	山	祥	觀	宮	羅			の
寺	福	寺	寺	寺	山	寺	寺	神	神			墓
	寺							社	社			

五、菊池氏年表

中	藤	菊
臣	原	池
氏	氏	氏
系	系	系
圖	圖	圖

忠誠 菊池小史

熊本縣立菊池高等女學校編

菊池氏の祖系



一、則隆

菊池氏の初代則隆公は藤原鎌足より十三代の後裔で後三條天皇の延久二年(紀元一七三〇年)肥後

の警固使ミして菊池郡に下向され深川村に居城して菊池氏を名乗られたのであります。以後子孫相承けて二十四代實に四百六十年の光彩ある菊池歴史の端緒をお開きになりました。

當時の居館は菊の城或は深川城とも云つて今も十八外城の一つに數へられて居ります。尙其の附近には則隆公の墓所をはじめ菊池家の厩別當を祀つた駄護地藏や由緒ある菊の池等もあります。

二、經 隆

則隆の長子で父の後を襲いで幾多の政績をお残しになりましたが其の没後は出田村に葬つて靈は若宮に祀つてあります。

西郷家 經隆の弟政隆は西郷太夫と云つて其の後裔には維新史上に有名な隆盛公を出したのである。現に加茂川村には西郷と呼ぶ一部落も存して居ります。

三、經 賴

二代の經隆には六子がありましたが經賴は其の二男で民部大輔と云つて本家を相續しました。

四、經 宗

經賴の子で菊池太郎と云つて父の後を承け鳥羽院の武者所に任ぜられた。其の末子井芹經益は井芹

中尾丸の城主で井芹家の祖をなして居ります。

五、經 直

經宗の長子に當る。菊池七郎と名乗つて鳥羽院の武者所に任ぜられました。此の頃から菊池氏の所領は各地に擴がり一族も愈扶植されて其の勢力は漸く四隣を壓するやうになりました。

六、隆 直

經直の子で菊池九郎とも云ふ。

平安朝の末期(治承四年八月)源賴朝が高倉天皇の庶兄以仁王の令旨を奉じて平家追討の軍を起したとき六代隆直は菊池の一族を率ゐて筑前に出で太宰府を焼きしが壽永元年平貞能に菊池城(雲上城)を圍まれて遂に降り。それから平家に従つて上洛し劔璽を守つて忠勤を勵み一の谷や屋島に屢々源兵を惱ましました。安徳天皇を護衛して壇浦に敗れるや隆直の嫡男隆長以下の數輩天皇に殉じて海に投じました。菊池氏の皇室中心主義の旗色は是から一層鮮明を加へて來ました。

後緒方惟能コレヨシが義經の命を受けて菊池城を攻むるに及んで隆直は城中に自殺しました(墓所不明)。惟能は進んで山鹿の靈域(吾平山)相良寺に入つて火を放ちました。今相良寺の觀音像が下げて居る首は

惟義の首であると云つて居ます。

つくしなる八方が嶽の麓にぞ

鬼とりひしぐものふはすめ

菊池氏の紋所は日足即旭日でありましたが、六代隆直が出陣の折鷹が飛來して二枚の羽根を背に落したと云ふ吉瑞に因んで、揃鷹羽の紋所に改め、更に違ひ鷹羽をも用ふるやうになつたと云ひます。

鷹羽に就て思出されるのは矢筈嶽であります。蓋矢筈を並べた形に似て居り、右の歌も菊池氏の武威を譽めたものでありませう。

七、隆 定

隆直の嫡男隆長や三男秀直は壇浦で戦没したので二男隆定が本家を相續して菊池家七代の當主となりました。

隆定は菊池次郎とも云つて後鳥羽上皇の武者所を勤め承久の亂(承久三年 紀元一八八一)には宇治勢多へ轉戦して忠勤を勵みましたが遂に官軍の敗るゝところとなつて三上皇の遠竄に公卿の流斬、續いて所領の收没となつたのは是非もないことでありました。

八、能 隆

七代隆定には七人の男子が有りましたが長男隆繼は早世したので其子(隆定の孫)能隆が後をつぎました。隆定の二男隆親は片角三郎と云つて小山家を興し五男定直は迫間村の元居に居城した。此の元居城は今の十八外城の一であります。末子隆益の林原家は最も繁昌しましたが今の打越城趾は其の居所で一族の墓所蛇塚の古墳上には今の馬渡城趾があります。

九、隆 泰

承久の亂後菊池氏の所領を見ますに、一旦鎌倉より没收されましたが菊池氏の所領は建長二年三月閑院母作られし時御家人の雜掌の交名を鎌倉より京都に具申したので隆泰の頃になつて返附せられました。即築地八十八本の中四本菊池入道跡云ふことが東鑑に見えてゐます。これは造閑院殿の頃は既に身まかりて其子隆泰の世であつたからであります。

一〇、武 房

元寇に於ける菊池氏の殊勳

一、蒙古の嵐

西歴一千二百年代の初頃から四代凡そ百餘年に亘つて吹き卷つた蒙古の嵐は東は東支及日本海より北は西比利亞、南は印度、西は伊蘭アラビヤ、土耳其阿羅思(ロシア)はおろか歐洲大半に達して其の猛威は聞くだに戰慄する。

近年獨乙のカイゼルが引起した歐洲否世界の大戦も蒙古の其れには及ぶべくもない。

二、飽くこゝを知らぬ勿烈は東亞の海に残る小嶋が癢にさはつたのか朝飯前に平げんものと、文永十一年十月初め戰艦九百隻に兵數凡そ三萬威風堂々ニ南鮮合の浦(鎮海灣ノ一部馬山浦)を出發した。對島を侵し(宗助國殉死)壹岐を呑み(平隆景戰死)海を壓して博多に迫る。(十月十九日)

スハ皇國ノ一大事

太宰府から飛ばした早打によつて馳せ參じた諸國の武士は肥後からは菊池武房、弟三郎有隆、同八郎康成、叔父西郷三郎隆政、六郎隆經、竹崎五郎兵衛秀長等一族郎黨引具して博多を指して駈付けた。九州は云ふに及ばず中國四國の武士も皆集つた河野道有の殊功も此時である。十九日今津の沖に現

れた敵の主力は漸次博多灣内に進入し二十日の未明には博多の市外百地原モモジハラの沿岸に上陸を開始し先頭部隊は早赤阪の高地に進出した。

雲霞の如く迫り來る大軍の前にはさしにも強き我が兵も先にと進む氣配もない。茲に菊池の勇將武房は此有様を見て猶豫しては一大事と手兵五百餘人を率ひて攻め來る敵に馳せ向ひ短兵急に斬り立てたので敵は不意を打たれて狼狽し龜原(塚原)へ逃ぐるを追撃又追撃!!

此時葦毛の駒に跨りて紫緘の鎧に燃え立つばかりの眞紅の幌をかけた武房の武者振の凜々しさよ。

此時(三つ目結びに旗押立てて)駈け付けた季長は主従五騎羨しげに聲をかける

「そこに渡らせらるゝは何方に候ぞ涼しくも見え給ふものかな」と……向ふの武士は會釋して「肥後の國菊池次郎武房ご申すもの。しか仰せらるゝは」と答へた……季長は「同じく肥後の國竹崎五郎兵衛季長敵陣にかけ候御覽候へ」と云ふなり早く敵軍を追撃した。

見渡せば元軍は雪崩を打つて敗走する。肥後の勇士が群がる敵の大軍を物ごもせずにかけて散らし敵の膽玉を挫いた元氣は流石に一異彩で我日本男子の眞面目を遺憾なく發揮して居る。

竹崎勢に追撃された元軍は再び陣を立て直し續々増兵して包圍的に進入して來るので我軍も續々繰

り出して壯烈凄慘なる白兵混戦は日没迄續けられた、此時菊池武房は一族郎黨百餘騎を二手に分ち群る敵に突進し當るを幸薙ぎ立て切り立て斬首五百に及んだ。

味方の損害も甚しく武房の弟八郎康成も數多の敵に渡り合ひ重傷を負て打倒れる。

有隆の殊勳

此戦に赤星三郎有隆は敵將に渡り合ひ一旦は敵の爲に組敷かれたが差添を抜いて下から敵を刺し敵將の怯むに乗じて勿ね返し直に首を誅するや鮮血ドツト迸り有隆の冑から鎧に注がれた。折しもさし昇る旭の爲に滴る甲冑の血潮は眞紅に輝いて赤い星のやう、何とも形容の言葉がなかつた。聽て菊池勢は殆ど全く戦死し有隆も山なる死骸の中に一時は倒れて了つた。

武房も死山血河の間に奮戦したが勝敗遂に決せず夜に入つて兩軍退却す。

翌二十一日黎明灣上一雙の敵艦なく志賀島の彼方に遙に一艦の漂泊するを見て捕獲する。

文永の役に於ける第一の殊勳者は武房であつた。

古武士の意氣

三、弘安の再舉以前に於て異國征伐の企圖あるや菊池の一族井芹彌三郎季重は衆に先じて従軍の注進狀を出した「これには飽田郡鹿子木莊内の所領田數や一門の人數、武器乗馬の事を報告し自分は八十五歳で歩行が不自由なれば嫡男越前房永秀以下の人々を従軍せしめ度いと上申して居る而して其の嫡男長季すら六十五歳の高齡であつた云ふに於ては古武士の意氣がうかゞはれる。

斯くて弘安四年(一九四一)夏の頃十四萬を乗せた四千四百隻の船が我が近海に迫るや輕舟を飛ばして奇襲を試み偉功を奏した。

曜閏七月一日に至り夜來の神風は一層猛威をたくましくして元艦を悉く顛覆せしめ死者浦を寒き玄海爲に血に染まる。

元寇に於ける菊池一族の従軍者は武房隆政隆經隆頼有隆康成顯秀等でありましたが武房は朝廷より甲冑を賜りしのみで幕府から何等の御賞にあづかつてゐないのは菊池氏が承久の亂以來幕府の感情を害してゐたためで誠に遺憾であります。

爾來春秋六百年大正天皇御即位の大典に際して從三位を追贈せられました。然るに武房の墳墓に就ては未だ所在がわからぬので御贈位(從三位)になつても勅令使の立たれるところが無いのは誠に残念な次第であります。

隆經は六郎と稱し城氏を稱へて山鹿年の城村及菊池郡木庭の城林に居城しました。

一一 時 隆

武房には八人の男子がりましたが嫡男隆盛は父に先だつて早世したので其子(武房の孫)時隆が襲封して十一代の當主となりました。然るに叔父武本は之を憤つて時隆と相刺して死にました。(時に時隆十七歳)

一二 武 隆

一、武時と大智禪師

武時は幼名を正龍丸(假名を次郎)と云ひ兄時隆の横死に遭ひ弱冠(十餘歳)を以て菊池家第十二代を襲封した。夙に文武の道を修め佛學を研究し肥後の出身大智禪師に資縁して京都諸山の僧と親み

志を朝廷に通じて竊に勤王の微衷を聞え上げた彼の山鹿郡にある醫福山日輪寺は正和五年(一九七六)武時(二十六歳)の修興に成るものであります。

大智禪師は守都郡長崎村(今の不知父村大字長崎)に生れ幼名を萬仲と云ひ七歳の時肥後の川尻大慈寺の和尚寒巖の門に學びました。當日の逸話に「そちの名は何と云ふぞ」「萬仲におざります」「幾つぢや」「七つにおざります」「側の饅頭を與へて食ふを見」「萬仲が饅頭を食べるとない心地がするぞ」「ハツ蛇が小蛇を呑むやうにおざります」「寒巖即智に驚き」「小賢しい奴ぢや出家したら小智と名乗つたらよからう」「嫌でおざります」「寒巖笑つて」「さらば大智と名乗つたらよからう」「云つたら遂に快諾しました。

寒巖寺の前面を幾つとなく往來する舟を指しつゝ、大智に向ひ「こゝから彼の船を止めて見よ」と云へば大智素直に立ちて前面の障子を閉めました。寒巖「手や足を用ひず座ながらにして停めて見よ」と云へば大智は便ち瞑目しました。快哉。

二 武時の舉兵

源氏は三代で政權は北條氏に移りましたので稀代の英主後醍醐天皇は御憤り甚しくひそかに公卿及諸國の武士を連ねて討幕の御企をなさいましたが不幸にも六波羅に漏れて此の御企ては頓挫しました（正中元年）次で再舉の御企も幕府の探知するところとなり遂に關東からは三千の大兵を送つて京に都攻め上りました。

行在所笠置も落ちて元弘二年三月天皇は隱岐へ三親王はそれ／＼土佐、讃岐、但馬の避地へ遷され給ふこと、なりました。

これより先き護良親王は幕軍の追撃を免れて吉野に入り朝敵征伐の令旨をお下しになつたので勤王の志士は各地に起り肥後には稀代の忠臣武時が現れました。武時は武房の孫で（父隆盛は早世し）夙に大智に従ひ佛道を修め諸山の僧と結んで朝廷に通じ討幕の準備に勤めました。

護良親王の令旨を戴いて間もなく天皇も伯耆の國から綸旨及錦旗をお授けになりました。斯て風雲急なる秋九州探題北條英時が諸侯を博多に招集しましたので武時は機至れりと一族三百餘騎を率ひ

て阿蘇氏と共に肥後を出發しました。

武士の上矢の鏑一筋に

思ふ心は神ぞ知るらん

とは出發前阿蘇宮に詣での詠であります。

武時の一隊が博多へ到着前節田宮の前を通過して居ると其の乗つた馬が俄にすくんで一步も前進するこゝが出来ぬので武時は「如何なれば寂阿の朝敵征伐をお尤めたまふ可き其の儀なら一矢放つて参らせん受けて御覽ぜよ」二矢迄連射し遂に駒を進めたまふ逸話があります

實に武時の勤王は眞理に基くものでこれを妨ぐるものは神をも射伏すべしと云ふ強い信念の程が窺はれます。

三 博多の合戦

元寇三年三月十一日博多に着し翌十二日探題邸に出頭しましたが心意を疑はれて遂に入邸を拒絶されました武時憤然として息濱の營に歸り夜になつて盛な酒宴が開かれました。死だも辭せぬはやり雄

に何で斗酒が辭せられやう、殊に武時の二男頼隆は生來の大酒家で舞ひつ躍りつ出陣の間際まで飲み續けました。三月拾三日午前四時博多の各地に火の手を擧げ少貳大友の許にも急使を走らせました少貳は約に背いて使者を斬り大友も又斬らうとしたので使者は一目散に走せ歸りました。此時武時は錦旗を掲げて軍を督し、節田の濱には磯風に翻る一門の旗を前に軍容堂々と陣を布きました。

押寄せた北條軍を相手に猛烈な戦闘は開かれる。優勢な菊池軍は一撃の許に破つて探題邸へ突進しました。時英急を拒く能はず將に自殺せんとしましたが偶少貳大友數千を以て菊池軍の後を突くことは是非もない。武時衆寡の敵し難きを察し直に嫡子武重を呼んで

「我今北條と戦つて義の爲に死す汝速に菊池に歸つて兵を起し恨を泉下に報ぜよ」と後事を託して

故郷に今宵ばかりの命とも

知らでや人のわれを待つらん

と、切取つた直垂の袖に墨痕鮮に記して故郷の妻子へと手渡せば武重は一諸に御供申さんとすがりましたが「汝を天下の爲に留むる」に嚴然たる父の一言に父訓重しと遂に訣別して肥後へ歸りました。

間もなく猛烈な戦闘が開かれましたが官軍頗る苦戦に陥り武時は子頼隆以下犬射場に於て遂に悲壯

な最後を遂げました。

武時の弟二郎三郎は殘兵七十餘名を率ひ猛然として塀を越え城戸を破つて遂に探題邸に闖入し火花をけつて戦ひましたが遂に一人残らず悲壯な戦死をとげました。

別格官弊社菊池神社は武時を主神とする。

元弘三年三月十三日博多に死す(年四十二歳)

墓 所

首塚は福岡市外早良郡鳥飼村にあり

胴塚は福岡市外早良郡原村椎木にあり

昭和八年が六百年忌に當る

一三 武 重

時重は急轉して建武の中興の秋は來ました。武重一統の功により肥後の守護職に任ぜられましたが建武二年以後は上洛し中央にあつて正成等と共に忠勤を勵むことになりました。

一 箱根の先陣 千本槍

足利直義鎌倉に反し、武重は新田義貞と共に三萬餘兵を率ゐて箱根に向ひました。そして十二月十

一日には手兵一千を以て直義の三千餘騎と大に會戦しました。これより先き武重は將士に命じて竹を切り短刀を着けて敵に突進し遂に奇勝を得た。これが有名な菊池の千本槍であります。(千本槍は今尚菊池神社に寶物として一部が)我が國には從來鋒はあつたが槍を發明したのは武重公でありまゝり。後新田楠木氏等と共に大に京都で尊氏を破り遂に九州へ走らせました。

武重の墓所は隈府町且元東福寺觀起院跡にある老杉の下に龜の跣座ある碑が即之であります。

二 武敏少貳貞經を誅す

尊氏が京都に入つて間もなく、北畠・新田・楠木・菊池・名和の諸將は、之を攻め破つて、京都を恢復したので、尊氏は海を航して西走し、赤間關に着いて、九州の豪族少貳・大友に迎へられてついに筑前蘆屋の浦につきました。

此の時菊池武重の弟武敏は、本國にあつて父の志をつぎ、勤王軍の先驅として現はれ、附近の賊を攻撃し、延元元年二月、阿蘇惟直等と太宰府にある少貳貞經(妙惠)を討つべく筑後に進入しました、少貳貞經は正に尊氏を迎へて、菊池氏と一大決戦を開かんとして居た時でありましたから、武敏

が大軍を率ゐて北上すると聞き直ちに諸將を遣はして之を要撃させましたが、却つて敗れて退きました。武敏は進んで高良山に陣したので、貞經は自ら原田、畔倉を先鋒として之を攻撃しましたが、武敏は逆に攻め寄せ、筑前水木の渡しに戦つて大いに少貳の軍を破り、貞經の軍を有智山城に撃退しました。

武敏は手合せの最初に勝利を得て、幸先よしと打ち悦ぶ處へ、秋月種道が兵を率ゐて來應しましたので、頓に其の勢をも合せて、少貳貞經の楯籠れる有智山城に押し寄せました。此の時貞經は味方の多數は、尊氏の許にある其の子の頼尙に従ひ、過半は水木の渡に討たれたので、城に残る者は僅に六百人にも足らず、とても武敏の大軍に叶ふ可くもないが、要害堅固の城とて、城門を閉ぢ、切岸の下に菊池勢を見下ろして防ぎ戦ふこと數日に及びました。

此時惠良惟澄は、大いに奮戦し、遂に負傷して肥後に歸りましたが、武敏は撓まず屈せず、君の仇なり父の讐、攻め崩さでおかれよかき新手を入れかへ、夜晝十方から攻めかけたので、逃るに道なく貞經は遂に自殺を遂げました。因果の道理は争はれぬもの、菊池武時は先きに博多にて少貳貞經等のために悲惨の最後を遂げましたが、今は貞經が武時の子武敏の爲めに誅せられたのであります。

三 多々良濱の激戦

菊池武敏は阿蘇惟直と共に、尊氏の軍を撃破せんとし、軍容堂々と博多に進軍して、尊氏の近づくを待ち構へて居ました。尊氏は三月一日筑前の蘆屋を發し、軍をさし向けて陸路宗像に向はせましたが、菊池軍の來襲を聞いて、自ら出陣し、香椎社前を過ぎて遙かに遠近の地勢を展望するに、こゝに五十町ばかりの干潟なる多々良濱がある。南端は小川に接し、四方一里は松原で、其の中に箱崎八幡宮があり、東は二三里の間平野連り、西は海に臨んで居る。尊氏は地形をみたてて、この松原の間に陣を取り、武敏は小川を越え、松原を背にして鷹の羽の旗風勇ましく陣を布きました。

尊氏は高師直を先鋒とし、大友、島津等の軍を本軍とし、別に少貳頼尙を東方に配して直義の軍を正面より懸らせました。そこで菊池軍は、専ら敵の左翼を襲撃せんとし、聽て兩軍入り亂れ、大血戦は開かれました。氷刃空を摩し、憂々の音大に響いて物凄。此の時官軍は勢力頗る旺盛、賊軍は容易に敵し難く見えました。義長等は死物狂ひに奮闘したので、官軍も支へ難く、遂に博多須の濱まで退いた。武敏大いに憤激し、獨り麾下の兵を率ゐ、更に北進して敵軍の中に突撃したので、形勢

忽ち一變し、足利勢は、殆ど危地に陥つた。そこで直義は死を決して使を尊氏に遣はし、錦の直垂れの右袖を切つて之を贈り「直義防戦仕る間に、早く長門周防に渡り、再舉を圖り給へ」急を告げた將士等之を見て感激し、死を決して奮戦したので、官軍稍不利の地位に立つた處へ、開戦始めより進みもせず働きもせず、形勢を見て差し控へ、味方について居た松浦神田の諸兵は足利勢のよいのを見て、直ちに旗を巻き胃を脱いで足利方に降服した。味方は減る敵は増す、武敏大いに彼等の不義怒つて猛烈に戦つたけれども、衆寡敵せず遂に多々良濱の遠干潟を引退き、無念の涙を吞みつゝ、筑後を経て肥後に退いた。尊氏の將仁木義長は、松浦黨を率ゐて肥後に追ひ、玉名の安樂寺、合志の鳥栖原等に官軍と戦つて、殘兵を破り、進んで武敏を菊池に攻めたので城は陥落し武敏は遂に深山に身を潜めましたので九州全土は遂に尊氏の占領するところとなりました。

多々良濱の敗戦によつて官軍退却と共に秋月種道は太宰府に退いて自刃し、阿蘇惟成は、武敏と別路を取つて肥前の小城に迫りましたが賊兵の爲に圍まれて衆寡敵せず、一族以下百六十餘人と共に枕を並べて悲壯の最後を遂げた。此の時惟直は阿蘇の噴煙を望見す可き地に葬るやうにと遺命されたので、家臣は天山の頂に葬りました。明治四十四年十一月、惟直は正四位を、大正三年十一月、武敏は

從三位を、惟成は從四位を追贈せられました。

四 菊池氏の家憲

延元三年七月菊池武重公は寄合内談衆を置き一族合議によつて家憲を制定し爲政の方針を確立して力を民政に注ぎました、これが即今日の立憲政治であります。

寄合衆内談よりあひしゆないたんの事

落去

段

所存

落附

一、天下の御大事はないたんきちやうありこいふもらつきよのたんは武重かしよそんにおとしつくへ

し

二、國務政道内談議尙こくむのせいとうはないたんのきをしやうすへし武重すくれたるきをたすこいふともくわんれい

以下内談衆統

議捨

議出

管

領

議捨

議出

管

領

議捨

議出

管

領

三、内談衆統ないたんしゆ一さうしてきくちのこほりにおいてかたくはたをきんせいしやまをしやうしてもし

氣増家門正法共龍華曉やうのきをましかもんしやうほうとともりにうけのあかつきにおよばんこきをねんぐわんすへし

敬八幡菩薩明照仰奉つゝしんてはちまん大ぼさつのみやうしやうをあほきたてまつる

延元

藤原

武重公は當事兵馬控惚の間にあつて植林農政に至るまで百年の大計をたてられた大政治家で菊池氏が

一門協力して終始一貫の忠勤を勵んだのも誠に故あることと云ふべきであります。

一四 武士

武重卒去して子無く弟又次郎武士が遺命によつて肥後の守に任ぜられ從五位の下に叙せられました

武士は武時の十一番目の子であります

武士は頗る政務に意を用ひ興國三年八月自ら起請文を認あ血判して之を神前に捧げました

天罰起請文の事

一、政道の事は衆人の議區々なりと云ふも正直の議を本とすべく假令武士勝れたる議を申すと云ふと

も對馬殿、林原殿、島崎殿、須屋殿の一統なくば我が議を捨てらる可く候此人々一統して定めら

れて候議をば敢て破可からず候(以下略)

これは兄武重が定められた家憲の第二條たる政道に關する事を具体的に發表したものであります

武士は深く大智禪師に歸依し、寂照と稱して慈教を受けましたが幼より蒲柳の質で攻城野戰に従事

することは思はしくないので父祖の業を失墜せんことを深く憂ひて其職を勇退せんと決心し興國五年之を奏請して遂に諸國修業の途につかれました。時に年二十一歳でありました。

肥後の葦北郡二見村正福寺は武士が終焉の地であるに傳へられて居ります。

一五 武光

一 武光と正觀寺

寂河入道の遺兒十數名は何れも忠精凛々氣骨稜々として菊池氏の名をなさしめたものであります、が中にも十郎武光は征西將軍の宮を擁して九州を一統し吉野朝後半の歴史をして燦爛たる光輝を放たしめた勇將で興國五年武士の勇退と共に菊池氏を襲封し十五代の統梁として肥後の守に任ぜられ從四位の下に叙けられました。

公は父武時が博多に戦死の際は幼少ながらも博多に出陣し父の陣營にありましたが官軍危殆となるや從者は之を博多の正福寺に忍ばせました。寺僧大方和尚は之を匿し戦後潜に菊池に送り届けました。後年武光が大方和尚を請じて隈府に正觀寺を建てましたのも之に因縁が深いのであります。

二 武光の隈府入城

菊池武士は諸國修業の途に上り繼嗣武光は未だ豊田から歸るに至らぬ中に筑後に吉木一族が叛旗を掲げましたので菊池の寺尾八郎をして之を討たせました。

此間合志幸隆が菊池へ押寄せ深川の外城及隈府の本城を攻めて之を占據したので武光は直に豊田を發し合志一隊の楯籠る深川の外城を焼拂ひ賊徒二十餘人を討取つて其翌日には隈部城を攻落しました。隈部城は菊池の本城で今の菊池神社の地であります。

斯くして新進氣鋭の武光は本城に居て一族郎黨に號令し一死君國に報すべき事を誓盟したのであります。

三 征西將軍の宮の御下向及菊池入御

後醍醐天皇叡山に在まして、官軍の形勢日に非なるを御覽せられ、竊に圖つて地方に官軍の勢力を養ひ、その來援を待つて形勢を挽回せんと、諸皇子に大將を副へて、各地方へお下しになりました。

殊に九州は重要な地であるから、皇子を差遣され延元元年九月十八日には、綸旨を九州の官軍に下し皇子懷良親王を征西將軍として派遣せらるべき旨をお傳へになりました。

そして懷良親王は、十月叡山を發して西國御下向の途に就かせられました。御潜行の事にて、僅に五條頼元中院義定以下の十餘人を御從へになり其の御道筋は大和から高野山に出で、紀伊の湯淺港から乗船せられて鳴戸を左にし、由良を右に取つて、瀬戸内海に入り讃岐路を経て伊豫の忽那島に入御あらせられ、忽那義範等の忠勤によつて、三ヶ年間靜かに形勢を觀望せられつゝ、九州征途の準備にかゝられました。

然るに後醍醐天皇は、延元四年八月の初から御病に罹らせられ、玉體日に衰へ給ひ、十五日には御位を皇太子義良親王に譲り、十六日の丑の刻(三時頃)遂に吉野の行宮で崩御になりました。此の飛報により懷良親王を始め御隨行の驚愕如何ばかりであつたでせうか、御西征のこと前途遼遠なのに、この御不幸を見た頼元等の痛嘆は、蓋し想像も及ばぬものがあつたこととせう。

延元四年の末、懷良親王は忽那島から九州に向はせられ、先づ日向灘を経て薩摩に向ひ、興國三年五月一日を以て遂に薩摩の津に着御あらせられ、谷山隆信の居城に御は入りになりました。

征西將軍ノ宮が、漸く南方の外海を廻つて薩摩に入らせられたのは、東北方の沿岸は大友少貳等の勢力盛なるに引きかへ、大隅薩摩の地には三條、肝付、伊集院等皆官軍の味方があつたからであります。けれども根本の御目的は肥後入御でありました。由來肥後の地は、九州の中央に位し、鎮西の統御に便なばかりでなく、殊に官軍の根據地として累代勤王を勵む菊池氏があり、阿蘇氏も亦勇戦奮闘して武家方の膽を寒からしめてゐるので、薩摩に在ます親王は、千秋の思で肥後の入御をおまちして居りました。種々の故障で、終に六ヶ年の長年月を薩摩の地に過しになりました。

將軍宮薩摩着御により、幕府は肥、筑の官軍を牽制せんと興國四年三月、大友氏泰の軍は、肥後に侵入して鞍嶽方面から菊池城を攻めました。翌月、田原正堅等も、また菊池城に迫つて兩度戦を交へましたが、一向手答はなかつた。此の時菊池にては、武重は既に卒去し、武重と共に活動して居た武敏も間もなく歿し、武重に代つて家を繼いだ武士は病弱であり、武光もまた年少なのでその勢一時甚だ振はなかつた。將軍宮の侍從中院義定は、先發として肥後に來着し、菊池氏と共に太宰府を攻めんとし菊池對馬守武茂、大城藤次以下、筑後に侵入して竹井城に據つた。五月十五日、一色範氏は肥前、眞前、豊前の諸族を率ゐて竹井城を圍んだけれども、抜くこゝが出来ず二十九日激戦があつたが、官

軍方は頗る難戦であつた、め七月二日に至り、官軍は遂にこゝを放棄し、夜の風雨に紛れて菊池に歸りました。

此の月、阿蘇惟時は足利氏に與して矢部城に據つたので、同族惠良惟澄は直ちに赴き攻めて之を抜き、尋いで惟澄は菊池武光と共に田口、甲佐、立早の諸壘を破り、少貳頼尙の代官饗庭藏人等の大軍を益城郡砥用に撃破するなど、奮戦大いに力めたので、將軍宮は令旨を與へて惟澄の戦功を賞せられました。

延元以來惠良重澄の皇室に盡せし忠節は、實に大なるもので、武敏と共に大友を攻め、又孤城落日の有様に際しても敢て志を變せず、常に堅忍不拔の精神を以て、或は武重を援け、武茂を保護し、肥筑の野に轉戦し、屢々負傷すれども屈せず撓まず、丈夫の本領を發揮せる點には吾々も、嘆賞せざるを得ませぬ。惟澄は阿蘇惟時の兄惟國の子であります。

將軍宮は薩摩に在しますこゝ六ヶ年、屢々島津貞久の軍を破られましたが、正平二年十一月、いよ／＼谷山御所を發し、山川津より御乗船、やがて櫻島を後にして海路肥後に向ひ、正平三年正月二日を以て宇土の津に御到着になりました。當時八代にあつた中院義定を始め、惠良惟澄、菊池武光、内

河義眞等の人々は、相率ゐて奉迎し、正月十四日、親王の御一行は宇土津を發して菊池へ向ひ、途上惟澄に縁故ある御船城に入御あらせられ、阿蘇惟時に拜謁を賜はりました。惟時は、元弘、建武には自ら出て忠勤し、彼の多々良濱で戦死した惟直惟成の父であります。一兩日御逗留の後、直ちに御船を發し菊池一族の保護を受け、菊池の本城に入りて此所を九州鎮定の御本營にお定めになりました。新進氣鋭の菊池十郎武光が、大活動の舞臺は將にこれから展開されるのであります。

菊池 十八外城

菊池氏は菊池郡全体を以て一城廓こなし隈府に本城を置き其周圍に要塞的十八の外城を設けて其の固めとなしました。

一、隈府本城

其内最も人工を加へたものは隈府の本城で或は雲上城、守山城、隈府城等とも云はれ今の菊池神社の鎮座在す地が即ちこれでありませぬ。

茲は標高一二六米(約四〇〇尺)で大手門を羽手木の四辻地藏附近に搦手門を戸豊水の牛嶺山に設け

南は菊池川と北は迫間川を限り尙此間南北に各外濠が設けてありました。そして南北朝の頃征西將軍の宮二十年の御本營を始め菊池氏代々の居城となりました。

二、菊の城

菊池村北宮にあり元深川村の一部で深川城とも云ひ。延久二年則隆公下向の際居を定められ以後數代の居城となる。即隈府本城に對する前衛であります。

三、城林城(止林城)

河原村木庭の西南岳にあります、北は斷崖下に菊池川を控へ西南には數十尋の深谷があつて地形が最もよく城市代々の居城でありました。今も毎年四月三日の花時には部民登上して遺靈を慰めます。

四、戸崎城

戸崎村字今の背後眺望絶佳の丘上にあります。鹿島氏代々の居城でこゝは萬太良城方面の敵に備へたものであります。

五、古池城

花房村出田の南岳にありまして今は宮地嶽神社の所在地になつて居ります。こゝは出田氏代々の居城で前面に菊池川を控へて敵の正面攻撃を免れ得るの地利を有つて居ります。

六、龜尾城

清泉村字龜尾の山林中にありまして、西北に不動岩北に矢筈の眺望をほしきまゝにして居ります。茲は關部市代々の居城で合志方面の敵を第一次とし鹿本方面の敵を第二次的に備へたものであります。

七、馬渡城

清泉村龜尾にあつて城趾は今の古噴地で石棺の破片がこころ／＼に露出して居ります、此城は蛇塚氏の居城で西光寺城と呼應して鹿本方面の敵に備へたものであります。

八、打越城

清泉村蘇崎(俗に錢龜塚)の高地にあります。本城は林原氏代々の城居で台城と共に鹿本郡方面よりの侵入に對する第一線に當つてゐます。

九、正光寺城(加惠城)

加茂川村加惠の平野にあつて加惠氏代々の居城で前面は迫川に臨み後方に菊池川を控へ現在の城趾は小丘上二三の樹木と周圍に池を繞して居ります。此の城も鹿本郡方面よりの浸入を防ぐ第一線に在ります。

一〇、増永城

加茂川村西郷の東端平野に當り前面迫川に臨む。西郷氏代々の居城で此の城も鹿本郡方面の敵に備ゆる第一線であります。

一一、臺城

砦村水島の台地にあり東北一帯八方岳に續き西南一帯田園遠く開け木野川は其の直下を走る要害の地で往昔今川貞氏の軍が菊池武朝の小勢に破られたところでもあります。

現今も陸軍機動演習に際し屢々防禦陣地として利用せられて居ます。こゝは菊池氏の番城のあつた所で打越この間に馬渡、正光寺、増永の三城と連絡して筑豊軍の侵入に備へたところで菊池氏が如何に此方面に意を用ひたかを知ることが出来ます。

一二、神尾城

砦村水次神社の西北竹林中に城趾の石碑があります。こゝは水次氏代々の居城で台城の後方援護の位置にあります。

一三、葛原城

迫村市ノ瀬の竹林中に在つて北に八方嶽を控え東、南遠く鞍岳及金峯山を望んで居ます、こゝは市ノ瀬氏代々の居城で主として八方ヶ城方面の間道に備へたものであります。

一四、鷹取城

龍門村染土に在つて眼下に迫川を臨み南は雪野の谷に對し天授弘和の頃は將軍の宮の御在城とも傳へられて居ります。此城は原田氏代々の居城で豊後勢の來襲に備へたものであります。

一五、五社尾城

龍門村雪野の奥眞徳寺の廢城の附近にありて城主不明。此城は鷹取城及び掛幕城に連繋して豊後勢の進入に備へたものであります。

一六、元居城

迫村字茂藤里の山林中に在りまして今は只唐濠の跡だけが残つて居ります、此の城は菊池七代隆定

の五男伊倉七郎の居城で掛幕城の後備として日田勢の防禦に備へたものであります。

一七、掛幕城

水源村柏の高原上にあります。東北は數千尋の溪谷を以て壑濠とし西北方に立門川を望むこゝは柏氏代々の居城で専ら日田方面の敵軍來襲に備へたものであります。

一八、市成城

一名奥山城とも云つて居ります。水源村字市成の森林中菊池川と市成川との中間なる小岳上にあります。こゝは年々城番交替にて警固し、菊池氏没落後細永氏が據りましたが狩遊中豊後勢に焼かれ現在は猪鹿の巢窟となつて居ります。

一九、黄金塚城

水源村四町分字塚原の丘陵上にあります。城跡は現今耕地となつて老松の許に石碑の神を祭祀つてあります。こゝは總谷及び平山兩氏の居城で市成城の後備として阿蘇方面よりの侵入軍に對する第一の防備線に當つて居ります。

良成親王の御下向

正平十六年懷良親王が太宰府に入御以來、御在所を太宰府又は博多にお奠めになり、武光は之を補佐し奉つて、勢威愈々熾んに、九國の草木爲に風靡するの概がありました。

是の頃に當り、肥後に於ける阿蘇惟村は依然として武家方でありましたが、武光に窮追せられて、阿蘇の山奥深く居を退きて殆んど勢力はなく、無二の忠臣たる惟澄も、この頃既に年老い、十九年の初頃より疾に罹り、遂に九月二十九日を以て卒去しました。思ふに惟澄は、延元の始から終始一貫王事に力を盡した大忠臣で、大小數百戰、毎に寡を以てよく衆を撃ち、屢々創を被り、更に沮喪の色もなく、克く節を全うしたものであります。惟澄卒して後、親王は直に次子八郎次郎惟武に遺跡相續の令旨を下され、大宮司職を繼がせになりました。明治四十四年惟澄は正四位を、大正四年惟武は從三位を追贈せられました。

正平二十二年五月二十八日、五條頼元も又七十八歳を以て卒去しました。回顧すれば、頼元は、過去三十餘年間、親王に咫尺して御養育申し上げ、或は薩摩の邊境に、或は九州平定の征途に出で、

幾多の艱苦を嘗め、帷幄の間に參し、九州平定の基礎を固めたもので其の勳功と伎倆は、中央政府にあつた北畠親房にも比すべきものであります。

親王は、豫ねての御素志である東上の御計畫を御實行になりましたが、九州は、なほ武家方の者もあるもので、御東上につき後顧の憂を絶たんが爲、別に征西將軍ノ宮の御差遣を吉野に要請になりましたので後村上天皇第六の皇子良成親王の御下向さいふ事になりました。

時に正平二十二年十二月、將軍義詮は疾みて歿し、僅に十歳の春王丸が名を義滿と改めて後を継ぎましたので、親王はこの機逸すべからずとて、こゝに東上の軍を起して、中國に討ち入らうとしましたが中國、四國には勢力ある足利方の細川氏や大内、大友等があつてこれ等の爲に阻止せられ、遂に目的を果し給ふことの出来なかつたのは誠に遺憾であります。尋いで良成親王は、九州から四國にお渡りになり、伊豫に御滞在の中河野氏に奉ぜられて、四國平定の御任務を盡させられ、御經營は次第に進んで參りましたが時に後村上天皇崩御になりましたので官方不振の爲め、良成親王は再び九州に還御せられました。

針摺原の激戦

武光の目覺しい活動は正平八年二月に於ける筑前針摺原の戦に始つて居ります。初め少貳頼久官軍に降り一色範氏再び賊軍に應じた際範氏は子直氏をして頼尙を古浦城に追及せしめましたので頼久は急を告げて武光に援を求めました。武光は一族城、赤星、鹿子木、安富等の兵を率ひて頼久を援ひ二月二日太宰府の南針摺原に達し大に一色軍を破り賊將原田貞廣以下の數將を屠りました。

一色軍の敗戦は薩摩に於ける官軍の蜂起を促し遂に九州に於ける朝野の形勢を一變せしむるに至つたのであります。

少貳頼久は古浦城に於て既に危き一名を武光から救はれましたので大に感謝し今より後子孫七代に至るまで菊池に向つて弓を引き矢を放つことあるべからずと熊野の守札に血を絞つて起請文を認めこれを武光に捧げた程でありましたが數年ならずして又賊に投じて了ひました。

北九州及日向の征伐

其後正平九年八月武光の兄菊池武澄は肥前の島原に渡り多比良城を攻めて九月之を落し正平十年九月一日小城城を攻めて千葉氏を一撃し十月二十五日豊後に打入りました。

扱而懐良親王の北征には武澄主として之に當り武光は南征して島津氏を歸順せしめ正平十三年十一月自ら手兵を率ひて日向に入り短兵急に直顯を破り更に三股城を降し十二月二日志布志に来て大慈寺に兵士狼籍の禁札を掲げ再び菊池に凱旋しました。

筑後川の戦

大原合戦(一)

小貳氏は九州北部でも有名な豪族で菊池氏にまつても侮るべからざる大敵でありました、然し武光も武勇絶倫の英豪で尙父武時が博多灣頭の一戦に少貳氏のために戦死したのでありますから其報讐の爲にも此強敵をくぢかればならぬ。殊に懐良親王は既に御年齢三十左右に達し、剛毅の御氣象は益々

盛で自ら三軍を叱咤し朝敵少貳頼尙を討滅せんと思召し、茲に一大決戦の準備は全く整ひました。正平十四年七月官軍は軍容堂々と燬くが如き炎暑を冒して菊池を發し、筑後平野に進出して高良山、柳坂、水繩山の三ヶ所に陣を布きました其の勢は實に四萬餘騎と云はれて居ります。

今や兩軍十萬の貌貅筑後の大平野に相會して悲風慘膽劍電血雨の大原大合戦所謂筑後川大激戦は將に展開されんとして居ります。

時は正平十四年七月十九日、武光は手兵八千の中五千騎を決死隊とし武光自ら之を指揮して夜陰に乗じ筑後川を渡つて進軍しました、其の時味坂庄に陣した頼尙は全軍に令し三十餘町を退却して大原に陣を布きました。抑も大原は大保原、小郡野、山隈原間を併せた茫邈たる筑後川の大平野で、西は肥前に連り、北は筑前に界して大振山一帯の高地を負ひ、南は筑後川を隔て、高良山の連山を望み、太宰府の奥に發源する寶満川は帯のやうに流れ來つて此平野を抱擁し遂に筑後川に注いでゐる。筑後川を渡つた官軍は直ちに前進をつゞけやうごしましたが敵は多くの深沼を要害として官軍の來襲を防禦し而も沼中に通ずる道路を三ヶ所も切斷してゐたので兵を進める事が困難であります。武光は沼邊に來て沼を隔て、敵陣を望見すれば堂島から高樋に亘る高地線には少貳氏の四ツ目の旌旗國々の諸將

の旗印は天を覆ひ其陣形は整頓し、西北遙に大保原方面を視れば數萬の敵兵軍容堂々として陣を布き全長一里餘に亘つて居る。されば地形を敵狀に留まる事として續いて官軍の本隊も筑後川を渡渉して來ましたので本營は宮瀬に置き、第一線は岩田庄から福堂原に亘つて布陣し茲に兩軍對陣の姿となりました。兩軍の對陣は曠しく月を越え、兩軍先頭の間隔は甚だ接近して旗の紋さへ鮮明に見る事が出来る。武光は頼尙を辱めやうと思つて金銀の日月を打のた旗の蟬本に一紙の起請文を附して敵に示しました。是は嘗て頼尙が古浦城で既に一色軍の爲に撃たれやうとした時武光が援軍を率ゐて此危難を救ふたので頼尙は大いに感謝して熊野の守札に血書した誓詞でありました。斯くて武光は日夜敵情を偵察して策戰大に力めたのであります。

大原大合戦 (二)

機は正に熟した。武光は頼尙に對し一大決戦を試みんきて、先づ策を定め「夜半騎兵を以て敵の背後に廻し、一方には本隊を以て敵の先陣を夜襲して腹背相應じて敵軍を騷擾せしめ直に敵の中堅に向つて激烈な攻撃を開始する」の計畫を立てました。

八月六日夜半、武光の選抜せる三百の騎兵は夜暗に乘じ肅々として岩田の陣地を發し、寶滿川を辿

り、竊に敵の背後なる横隈附近に達し、百騎宛の三隊に分れ所在の地物に身を潜匿して我本隊の三聲の起るを今や遅しと待つて居ました。本隊は八月六日午後十一時頃から運動を起し、武光の甥片保田三郎武明を先陣の大將として先頭に日月を打つた軍旗を高く捧げ二千餘騎の士卒鎧袖相摩しつゝ前進すれば、第二陣は同じく武光の甥菊池孫次郎武信及び武光が母方の従兄赤星掃部助武貫の率ゐる千五百騎、第三陣は大將菊池武光の率ゐる四千騎、第四陣は懷良親王の自ら指揮せられた三千餘騎、第五陣は新田一族の二千餘騎、右翼隊は八代の名和、玉名の太野、筑後の溝口等の率ゐる五千五百騎、左翼隊は同じく新田一族の一千騎、肅々として小郡野に布陣せる敵の第一線を包圍すべく前進する。扱も敵の背後に迂回した騎兵部隊は潜かに我先陣の接近するを待つ中其の一部は早くも敵の巡邏に發見せられたので俄に起つて喊聲を揚げ火を敵陣に放ち猛烈に突貫した。敵軍は大に狼狽し、混亂喚叫、同志互に格闘せる其の中を我騎兵部隊は徐々に縦斷して南進し、我第一線部隊に到着しました。

敵陣は混亂其極に達し、同志討の爲に三百餘人の戦死者を出した。敵の騷擾に乘じ官軍の先鋒菊池片保田三郎武明は二千餘騎を提げて驀然として敵の先線に接近し、突如に喊聲を揚げました。敵の先陣は松浦黨及び原田、高市の諸兵七千餘騎を以て組織してゐましたが元來弱兵が多く、爲に官軍の夜

襲を見て大いに周章し、直ちに退却を始めました。此の時官軍の右翼隊は松浦黨の後方にある沼澤を渡渉して突貫して來ました。此沼澤が淺くして渡渉の容易であることは豫て偵知してゐたのであります。敵は側背から攻撃せられて益々狼狽し、數多の死傷者を遺棄した儘、本陣に向つて退却しました。其際方位を失し各所に散在せる深沼に落ちて溺死したものは數へ切れず、既にして夜はほのぼのと明け離れ臚げに彼我の旌旗を認むる事が出来る。菊池武明は直ちに進んで敵の前進隊の本陣に肉薄しました。少貳新左衛門武藤は之を見て兵六千を三隊に分ち、武明の軍を包圍して來ましたが、武明毫も屈せず其主力を目蒐けて斬込んだので、敵は其勢に怖れて敗走しました。本陣にあつた頼尙が子息新少貳直資は之を見て大に怒り、手兵二千餘騎を率ゐて馳せ來り、武明の軍に突撃しましたが、事急にして直資の陣形は次第に亂れ、武明は縦横無盡に之を粉碎し、官軍の武將玉名郡木葉の宇都宮隆房は松浦吉種、佐志將鑑間を斬り倒し敵の將卒は多く戦死し、敗殘の兵は潮の如く退却を始めました。直資齒嚙みして「言甲斐なき味方の奴原かな、引返して我と共に戦へよ」と呼號し、駿馬に鞭つて進んで來ました。此時直資の左右に従ふるもの纔に三十餘騎、衆寡遂に敵し難く直資は遂に宇都宮隆房の爲に首を打られました。

大原大合戦 (三)

少貳直資の死を見て勇將朝井但馬將監胤信、筑後新左衛門頼信、窪能登太郎泰助、肥前刑部泰親等は三千餘騎を督して菊池武明が軍の側面から猛然として突入して來ました。奮撃亂闘見る／＼官軍では武明を始めとして、城越前守、加屋兵部大輔、見參岡三河守、庄美作守、國分行喬以下一族郎黨百十餘騎壯烈な戦死を遂げました。爲に先陣の進撃は一頓挫を來して了ひました。

第二陣にあつた菊池孫次郎武信、赤星掃部助武貫の一千五百餘騎は頼尙が甥太宰頼泰等が固めた陣地に向つて進撃しました。敵は二萬餘騎を十八隊に分ち魚鱗に備へ、即ち味方の十數倍の大敵である。武信は先づ手兵九百を率ひ、武貫は手兵五百を以て前進し、兩隊白刃を翳して大軍中に突入しました。頼泰は逞兵五千餘騎を以て善く戦ひ、兩軍入亂れて劍電血雨の白兵戦を演出し、武信が乳人岡上左馬助は頼泰を格闘して遂に之を生擒し、官軍は赤星掃部助武貫、松田丹後守、結城右馬頭親明、加藤判官宗高以下三百餘人戦死し、少貳軍は饜庭右衛門藏人重高、山井三郎惟則、宗左馬太郎宗邦、木綿將監持有等の勇將猛卒七百餘人枕を並べて討死しました。

懷良親王は遙に兩部隊の状況を見て事容易ならざるを察し、駿馬に鞭つて自ら陣頭に立ち、頼尙の

本陣に突入せられました。敵の諸將は之を見て「將軍出たり將軍出たり射て落せ」と呼ばはりつゝ、鐵を集めて散々に射る。頼尙も士卒を勵まし「今は將軍は釜中の魚なり早く討つべし」と采配を振つて陣頭に立ち、松浦、日下部、山鹿、島津、澁谷等の兵二萬餘騎を左右に分ち親王の軍を包圍し雨霰の如く連射せしめました。賊將堀井常陸之助冬綱善く戦ひ、二千五百の將卒を磨いて親王に薄る、冬綱の臣芳賀五郎房則親王を射る、矢親王の左脇に中る、親王は鮮血淋漓尙も身を挺して奮戦せられる程に御馬さへ遂に射倒された、賊兵此状を見るや士氣益々百倍し、親王を捕へんと蝟集し來り、一兵進んで親王の左肩を斬る、宇都宮隆房時に年三十一、親王の御側に駆け來り近づく賊と格闘して死し、賊はいよゝゝ肉薄する、御痛はしや親王は三ヶ處の太刀創を受けさせられ、危きこと甚だしく、左右にある日野左少辨、洞院權大納言親弘、坊城三位有氏、花山院四位少將基直、春日大納言興文、北畠中納言信親、北山三位中將、土御門右少辨、高辻三位、葉室左衛門督惟言等は悉く敵刃に仆れ、御側の將士次第に僅少となり、加ふるに疲勞其極に達し、最早刀を揮ふの力なく、皆親王を圍繞して鎧袖を翳し、僅に流矢を防ぎ、身を以て白刃を支ふるに止まり、將軍の宮の運命は恰も風前の燈火の如く武光亦大軍に阻止せられて親王を援ふこゝが出来ず、如何はせんとする所、忽ち西方から一千餘の人

馬が驀然として殺到して來ました、官方は賊軍の増加せるものと思ひ、親王も亦自殺を決心なされましたが、焉ぞ圖らん此一群の人馬は官軍の左翼部隊たる新田一族の一千餘人で敵の右翼を驅逐中、親王の危急を見て、俄かに方向を轉じ、敵の背後から突入して來たのでありました。見ると親王は危機一髪の場合であらせられるので、新田一族は白刃を以て戦ふの追なく徒手にて親王を包圍せる賊軍と格闘し、命を限りに奮戦し、爲に新田一族中世良田大膳太夫、田中彈正大弼、岩松相模守、桃井右京之亮、堀口三郎、江田丹後守、山名因幡守等は茲に壯烈な戦死を遂げ親王は僅に一道の血路を開き一時福堂原に退却し、傷を包んで谷山右馬介義高及び近臣數人に護衛せられつゝ、草野の谷山城にお這入りになりました。

此の戦に戦死した片保田三郎武明、赤星掃部助武貫、見參岡三河守高子、庄美作守忠益、國分二郎行喬、加屋部大輔、宇都宮刑部承隆房、松田丹後守は別格官幣社菊池神社に配祀してあります。

大原大合戦 (四)

菊池武光は、懷良親王が重傷を負ふて退却せられ、左右諸將朝臣多く戦没し、新田一族も亦多く殘れたのを聽き、奮激して曰く「最早一兵も生還すべからず、日頃の約束に違はず我に伴ふて討死せ

よ」怒號しつゝ馬上に太刀を振り翳し、自ら士卒の先頭に立ち、嫡子二郎武政之に續き四千餘の菊池勢も必死となつて群がる敵中に駆け入りました。少貳勢此狀を見て武光父子を射落せと鏃を揃へて猛射し、武光矢を被る事蝟の如く、而も其鎧甲堅牢にして裏搔くものは一矢もなく、乘馬は射倒さるるも他人の馬に乗り替へて進み、馳突縦横血戦十七合、向ふ所草を刈るが如し。暫らくして武光が冠れる兜は射落され、髻切れて被髪面を覆ひ、群り来る敵兵の爲に小鬘に二刀を受け鮮血淋漓として面に濺ぎ、目眇裂け凄じき形相言はん方なし、少貳武藤遙に之れを見て「スハや武光は深手を負へり、生擒るは此時にあり」と單騎武光に肉薄し來り、大手を擴げて掴みかゝる、武光馬上に於て格闘し、俱に墜ち、忽ち武藤の首を斬つて鋒先に貫き、其の兜を取つて之を冠り、其の駿馬を奪うて之れに跨り大聲を揚げ「菊池肥後守武光は少貳新左衛門武藤に天誅を加へたるぞ、主將の爲に弔ひ戦はんとするものは速かに來つて勝負を決せよ」と呼號しつゝ、忽ち馬を躍らして頼尙の陣地に向つて突入した、爲に官軍の士卒勇氣百倍し、縦横に斬立てる、少貳頼尙此狀を望見して大いに驚き、先づ花立山に據るに決し、馬首を東に向くるや四萬餘の大軍は主將退却するものと誤認し、茲に總敗軍となり、潮の退くが如く退却を始めました、其の混雜甚だしく、先頭に退くものは、後方から退却する友軍を敵の追

撃し來るものと見て、周章狼狽、沼中に陥つて溺死するもの算ふるに違がない程でありました。

武光、武政は官軍諸隊を集結して追撃に移り少貳軍の大集團は馬市方面に潰亂し、大將頼尙は僅に二十四騎を左右に従へ寶満山に向つて退却しました。武光猶追撃を續行せんことを、部下の損害多大なるを見て爰に追撃を止め、山隈原に貫流する小川に至り、血刀を洗ひ、諸軍を收めて高良山に歸陣し、尋いで根據地隈府に凱旋しました。

此の日の戦は八月六日夜半から始まつて己の下刻即ち午前十一時に至り約十時間の戦闘で死傷者實に二萬五千人を算する、其の中官軍の戦死者は將軍宮の近臣十二人菊池一族十八人其他千九百餘人、負傷者一千餘人、賊軍の戦死者は少貳一族二十八人其他四千人、負傷者實に一萬八千餘人三里の曠野伏屍堆積して滿目慘狀目を蔽はしめたといふ。今に残る大將塚、千人塚、五萬騎塚等は其際の戦死者を埋めたものであると傳へられて居ります。蓋し九州には幾多の戦亂がありました。九國の大小名が率ゐた十萬の大軍が一平野に會戦したのは此大原合戦所謂筑後川の戦ひのみであります。

大原大合戦 (五)

世上に大原合戦を筑後川の戦と稱するのは歴史の誤傳と地理に委しからぬ爲誤られたもので、實

は筑後川の支流太刀洗川及び寶満川（古文書の床河）の流域に行はれたもので、東は三井郡太刀洗村山隈高樋の邊から、南は太刀洗村下高橋御原村用丸小郡村福童に及び、西は肥前三養基郡田代村秋光川の邊に至り、北は三國村西島に亘る一帯の地である。尙此戦を木屋文書、龍造寺文書、得永文書には皆大保原御合戦と記し、志賀文書、太平記、大日本史、日本外史等には大原と書いてあります。大原とは大保原、小郡野、山隈原等を含んだ平野の總稱でありますから今日では大原合戦と稱したが適當であらうと思ひます。

太平記、大日本史等は大原合戦の月日を八月十六日と記してありますが、時の記録たる龍造寺文書得永文書、高木文書（以上少貳方文書）木屋文書（菊池方文書）等に悉く八月六日と記してありますから無論八月六日が眞である。殊に十六日とすると満月の頃で夜襲に便でない、因に八月六日攻撃當夜の月齢は

月出 午前十時五十九分

月入 午後八時三十六分

となる、即ち弦月西山に沈んだ後官軍は行動を開始したのである。懐良親王の射創及太刀創（當時長

刀に因る切創を太刀創といひ、短刀に因る刺創を加多那創と云ふ）は頗る重傷であらせられたものに見えて鎮西要略には親王は大原役に於ける御負傷の爲、肥後柳坂に於て薨去せられたと記し、本朝通鑑には親王肥後に歸へり創を病んで薨すとの噂を録し、菊池合戦記には御歸陣の後、八月遂に空しく成り給ふて御傷死を是認して居る程であります。現に大原合戦御負傷の際谷山（新田）右馬助、親王の御供を承り、御身を白木綿にて巻き筑後水繩山の谷山城に至つて介抱しましたが、遂に八月十八日に至つて城内に薨去せられ附近なる柳坂千光寺（山本村宮園）に葬り奉つたと云ふ誤説さへある程であります。古來南筑の地を踏み正平己亥の昔菊池武光が馬を清流に止めて血痕淋漓たる軍刀を洗ふたと稱する太刀洗川の邊を過ぐるもの覺えず其故事を追想して無限の感慨に討たれ吟腸を刺激し咏嘆の聲を漏したものは尠くありません。殊に頼山陽の長吟三十六韻は、後代人口に膾炙し、爲に幾多の人をして、血湧き肉躍り彼の少貳、大友の肉を啖はんとの感を起さしめ、尙明治維新の鴻業にも影響したものが少くないと思はれます。

太宰府陥落と武光卒去

九州の諸族が次第に今川軍に参加し太宰府も征西府も次第に危殆を加へました。了俊は佐野山に陣を移して之を攻圍し五月より六七八月に至り周密なる用意を以て攻撃を加へました。

文中元年八月四日菊池武安は仲秋を酒見城に攻め日夜激戦を繼續しましたが遂に敵する能はず太宰府に走り有智山城に楯籠りました。仲秋は之を追つて今川軍に加はり八月十日太宰府の總攻撃を開始しました。

太宰府は親王を始め武光武政等も在城し之を敵手に移すは官軍興廢の分るゝところで必死の防戦に力めましたが賊勢益加はり十日には天山城陥り十一日には有智山城陥り十二日には哀れ太宰府も今川軍の手に落ち菊池武政は懷良親王を奉じて高良山に走りました。

思ふに正平十六年八月征西府を此に設けられてから十二年九州官軍の威武は南北朝時代の後半史に燦たる光を放たしめましたが機智縦横なる今川了俊の爲に鎮西の最中心地を奪はれたのは時勢の轉變とは云へ實に惜みても餘り有ることでもあります。

八月十日十一日十二日の戦闘は餘程の激烈を極めたもので其後に於ける菊池の軍機は一切武政の統べしより見て或は武光は此戦に壯烈な戦死を遂げられたのではないか？ 或は太宰府陥落の翌年即文中二年十一月十六日とあることより見るに病死らしくも思はれる。

一六 武 政

文中元年八日太宰府陥落後懷良親王は筑後の高良山に退いてこゝを官軍の策源地と定めました。高良山は標高僅に五百尺に過ぎない小峰であります。兵家の要地で武政及武安以下こゝを本據として策戦を計畫し敵の南下を阻止する一方豊後と連絡して太宰府の恢復を企てました。今川了俊は子義範をして阿蘇氏と結ばせ又日薩偶も連絡して官軍を衝かんとして計畫を進めました。

文中二年二月十四日武政武安は夜に乗じて筑後川を渡りて本折に進み四月隈城の敵を衝きましたので兩城危殆に瀕しましたが毛利元春の援によつて僅かに陥落を免れました。

武政は當時の難局を引受け自ら陣頭に立つて奮戦し軍容大に振ひましたが了俊の策略が着々功を奏するに及んで官軍の形勢は非となり將士は離散して勢次第に蹙まつて來ました。

了俊は益進略の歩を進め文中三年四月三日菅生に陣し部下をして生葉村に進入續いて放火せしめま

した。菊池軍は直に出動し終日の撃戦によつて之を撃退しましたが其後も交戦は日々に繼續せられましたので武政は遂に重傷を負うたため高良山の障營にて病臥し五月二十二日には郷里の正觀寺に辭令を送つて後世の菩提を祈念し二十六日三十左右の壯齡を以て父の跡を追うて陣歿しました。

一七 武 朝

高良山の退陣

文中三年五月武政が高良山にて陣歿の際嫡子賀々丸は僅に十二歳の少年で父に従つて其の陣營に在りましたが末頼もいし剛毅の氣象は焦宇の間に現はれて居ました。賀々丸(後の武朝)を輔けて今川軍の侵略を防いだのは菊池肥前守武安でありました。然し官軍の武光武政有繼いで歿した後の經營は益々困難となり一方今川了俊の計略は着々と功を奏し來ました。

文中三年八月三日賀々丸は高良山を出で筑後川を渡り賊將山内及毛利元春の軍と福童原に會戦しましたが敵は了俊の來援によつて益勢を得十七日には官軍敗れて河南に退き、今川軍の集中と共に高良山の陣營の保ち難きを察し十月の初賀々丸武安以下二ヶ年の經營に亘る高良山の陣地を退し懷良親王

良成親王を奉じて肥後に歸り隈府の本城に閉ぢ籠り外敵の警戒を嚴重に固めました。

水島の快戦

高良山が敵手に陥つて以來、筑後の官軍の諸城は相繼いで陥落しました。今川軍は進んで肥後に侵入し、其先鋒大友義匡、田原氏能等は、筑後谷川の本陣を發して肥筑の界なる大水山關を越え、進んで玉名郡小島村に入り、文中三年十一月には同城を陥れ、十二月には目野に通つて、千田、山本以下諸所の官軍を破りました。今川了俊は谷川の陣から書を阿蘇惟村に送つて其の出兵を促し、先づ仲秋、義範を進ませ、十五日、仲秋、義範は岩原の陣につき、こゝに先鋒の兵と相會して、遂にその冬を越しました。

其の翌天授元年三月、了俊は中國勢及び黒木邊の軍兵を率ゐて、谷川の陣を發し肥後に入つて山鹿に着きました。四月八日了俊は更に陣を日岡に進め、後に賀々丸の軍と相對峙しました。兩軍陣を構へて以來睥睨すると共に月餘に及びましたが、互に自重してなか／＼戦を交へない。

さて武光及武政を失つた後の菊池氏は、一時實に慘憺たる有様でありました。賀々丸未だ幼稚で自

ら判形を書ることさへも出来ぬけれども、武安以下の一族は、此の際必死の運動を興してせめて肥後一國の味方だけなりとも叛かしめぬやうにと努めました。賀々丸が阿蘇惟武に誓書を送つて援兵を請ふた文は、涙なくては讀まれぬ程で誠にその苦衷の程が察し得られます。

天授元年四月、了俊自ら日岡に來ましたので、菊池の御在所ますく危くなりました、五月六日、賀々丸は誓を惟武に遣はし、懇々諭して出兵を請うたのであります、其書には了俊の陣形整はない中に早くやつつきたい。我が父祖の代は無爲であつたのに我が世に及んでかく身の浮沈をも知り難い有様となつて遺憾である。殊に征西將軍宮は、たゞ我が菊池をのみ依頼せらるゝに「もしこのまゝにてらつきよ候はゞ、しやうく世々のむねんたるべく候。この御るをもやすめ申、又たうけのほんゐをもたつしたく候。しよせんひらにたのみ申候。御かうりよくにあづかり候はゞ、かしこまり入候。云々」僅に十四才の少年にして、斯る大責任を負ひ、一意皇家の爲に盡さんとする赤誠に感動せられざるものはあるまい。惟武が之を快諾した時の賀々丸の喜びは如何であつたらう。想ひ見るだに胸の躍る心地がします。

此の時に當り、菊池には懷良親王及び良成親王の兩征西將軍宮ましく、菊池氏の勢威も稍々揚

り、當年十四歳の賀々丸も又累代の家憲を嚴守して、一意君國の爲に盡さんとするの勇氣と決心とを有つてゐました。七月十二日、今川了俊は、遂に陣を菊池郡水島に進める事となりました。そもこの水島の臺地は、山鹿の東約二里、隈府の西一里の地點に在つて菊池本城の門戸に當り、東の迫間川と北の木野川との間に挟まる高原地帯で、菊池にとつては最も重要な關門の地點であります。三日の卯刻には、賊將了俊は既にこゝに着して陣を取り、菊池と南肥後の官軍との連絡を絶ちて専ら菊池本城の攻撃準備に力を盡し、深堀、國分、安富、都甲等の諸將をして陣中を警固せしめました、了俊はこの戦ひを以て九州に於ける兩軍の勢力の分るる所と認めたと違ひない。了俊は更に九州の三大勢力たる島津氏久、大友親世、少貳冬資に書を送つて、其の來援を求めました。氏久、親世はこれを諾して來陣しましたが、獨り少貳冬資が來會せぬので、了俊は氏久をしてこれを招かせましたので冬資は意を決して水島陣に來ましたが、八月二十六日、了俊は冬資を陣中に招いで款待し、酒酣なる頃、山内某をして冬資を搏たせ、更に仲秋をして之を刺殺させました。氏久は了俊のこの不穩なる處置を怒り、決然として歸國しました。此の事は水島に於ける兩軍勝敗の分岐する最大原因で島津氏久去つて後の水島に於ける今川軍の陣形は勢不利に陥り、將士は離叛し、士氣沮喪したが、了俊はなほ

木野城に對して三字田に築き、豊後勢を入れ、水島の古城を修築して肥前勢を入れんことを謀り、また所々に城壘を設けて菊池の農作を荒し、秋の收穫を害せんとの窮策を講じました。

菊池賀々丸(武朝)は、了俊の兵の士氣沮喪せるに乘じ機逸すべからずと猛烈に攻撃したので、了俊は遂に支へ難く、九月八日の夜に至り水島の陣を撤し、毛利、伊東、安富等の兵を率ゐて退却し始めました。そして急激なる追撃に應戦しつゝ大水山關を出で、筑後の瀬高、蒲地、酒見を経て肥前に退き横大路、國府を過ぎ、十月遂に遠く肥前杵島郡塚崎まで退きました。かくて了俊が五ヶ年の苦心を重ねた戦闘は徒勞に歸し、菊池氏再び其勢を得て親王の御勢力はまた筑後、肥前に伸ぶるこゝが出来ました。

矢部御退隱

菊池御在城の懷良親王は征西將軍の職を良成親王にお譲りになりました。元來矢部の地は五條氏の所領で菊池とは間道から連絡し前には黒本氏が在り後には阿蘇氏が在つて官軍の爲には險要の溪谷であります。即五條頼元の子良遠は此の地に住して御退隱後の懷良親王を迎へ奉つたので之れ以後が征

西將軍の宮良成親王の御活動の時代となります。

因に懷良親王は弘和三年三月廿七日御齡五十六歳にて薨去遊ばしたのであります。

訶磨原に於ける菊池軍の奮戦

天授元年懷良親王は、征西將軍の御職を良成親王にお譲りになつて、筑後の矢部にお移りになりましたので五條良遠は、矢部に於て御退隱後の親王を迎へ致す事となりました。此時今川了俊は、肥前にあつて再興の策を講じつゝ、ありましたが、菊池氏も其の對應策として天授二年、賀々丸は良成親王を奉じて武國、武元及び葉室親善、善安等を率ゐて肥前國府に討つて出ました、了俊は壘を築いて、官軍の來襲に備へ、九月には今川仲秋が松浦黨を隨へて博多に來り、筑前を鎮定して豊肥の連絡を取らうとしました、そこで賀々丸は肥後守護代菊池武國を遣はして、大綱で仲秋の事を大いに破つたので、仲秋は再び肥前に逃走しました。

二年の冬、大内儀弘、大友親世は、豊前、豊後の大軍を率ゐて、今川の軍に投じたので、了俊は大いに勢を得、良成親王も又種々の準備を整へられつゝ、兩軍こゝに越年し、天授三年正月十三日兩軍

大いに千布、蟻打に戦ひました。是の日賀々丸は、武安と共に良成親王を奉じ、一族を率ゐて陣頭に出で、奮戦し之に當つて頗る激戦が行はれましたが、官軍は不幸にして大敗し、武光の弟なる武義入道自關及び武安、阿蘇大宮司惟武を始めとして、葉室善安以下多く戦死しましたので、菊池氏は僅に賀々丸が良成親王を奉じて戦死を免かれたのみでありました。

千布、蟻打の敗戦は、官軍にとつて多大の打撃となり、良成親王は、菊池賀々丸、葉室親善等に擁せられて再び肥後にお退きになりました。了俊及仲秋は之を逐うて遂に肥後に侵入し、山鹿志々木原に陣し、將に菊池城に逼らうとしましたが、官軍力戦して遂に之を退けました。

八日、了俊は、仲秋及び大内、田原、毛利、松浦等を率ゐて、肥、筑の境なる白間野、大水山關より白木原にかけて官軍と戦ひましたが、大内氏の軍が奮闘したので、官軍遂に敗れ、值田宮（良成親王に従ひ給ひし宮ならん）を始め、菊池氏の一族以下百餘人戦死しました。

了俊は、大水山關以下の戦に捷を得ましたので、直に南下して合志郡板井原に出陣しました。此の時肥前から了俊に従ひ來た深浦、安浦等の外、新に安藝國から須藤景平、但馬經中の如き諸將も來て板井原の陣に加はりましたので、今川軍の勢は益々振ひました。一方、了俊は肥後の鎮定を仲秋、義

範に委して博多に還りましたが、今川軍は菊池、合志を犯して、遂に隈本城を圍み、仲秋は其の主力を率ゐて、目野の陣中に天授四年を迎へました。

了俊は、菊池氏が白木原の戦以後大に衰微したのを機として、更に打撃を與へんと、九月博多を發して再び肥後の野に討ち出で、十八日には隈本の藤崎に陣し、大内義弘、盛見及び大友、去川、碓山新納等の來着をまつて數千騎の大勢となつたので、愈々進んで菊池城を攻めようとなりました。武朝は之を聞いて直ちに良成親王を奉じ、一族及び葉室親善以下の兵を督して了俊の大軍を詫磨原に迎へ、二十九日、遂に激戦が始りました。武朝は當時に十六歳の少年でありましたが而かも寡兵を以て中國九州の重なる諸大勢に抗して戦うので、唯天運に任せて奮闘し、必死の勇を振つて戦ひましたが衆寡敵せず、一族以下銳卒數十人遂に戦死し、武朝も傷を被むり、官軍はまさに潰散せんとする危急に瀕したのであります。良成親王は未だ二十歳に満たせ給はざる血氣盛なる御齡でありましたが、この状態にいかでか躊躇し給はん。自ら陣頭に立つて兵を指揮し、雲霞の如き了俊の陣に向つて、突撃奮闘し給うたので、味方は爲に勢を恢復し、敵兵は收れて退散する事となり、斯くて才幹非凡なる了俊も詫磨原の戦に敗北し、已むなく筑後へ退却しました。思ふに菊池氏僅に十六歳の主將を以て探題了俊

に對抗し、しかもよく數回にわたつてこの驍將を撃退し、彼をして後へに墜若たらしめたのは、偏に菊池氏の團結の鞏固にして、しかも一人の叛者も出さずにとゞ苦闘倒れて後己むの精神に充ち満ちてゐたのに外ならぬのであります。

菊池の落城

筑後にあつた今川了俊は再び軍容を整へ、九州、中國の兵を合せて肥後に侵入し、本軍は仲秋之を卒ゐて、天授五年八月、伊倉、圓山等の官軍を攻撃し、十四日には千田原に至り、十六日には平尾城を攻めて之を陥れました。仲秋はまた別に橋公次等を遣して竹迫の官軍を攻め、十八日には板井原に着きました。板井原は、隈府の西南一里餘の高原で、直下に菊池の平野を望み、遙に菊池の本城を展望するの要地であります。そもくこの頃は天險を有する自然の地域を利用して城を看なし、其の防禦地内に多くの小城寨を配置したもので、即ち菊池氏も菊池川の流域たる菊池郡全体を天然の城となし、中央に本城を置き、域内各地に十八の外城を配置し、其の外城には一族を分據させて置いたのであります。されば今川仲秋が菊池の本城を攻撃するのは容易の業ではなかつたので、仲秋は根據を板

井原に据ゑ徐々に攻撃して漸次其の本城を陥れやうと九月十九日から攻撃を始め、二十七日には赤星城、九月五日には木野城を攻めました。が陥れるこゝが出来ず、菊池軍もまた最後の地として最も頑強に抵抗し、容易に城を棄てない。殊に同地は菊池氏が多年の勢力を扶殖せる所で、決して容易に陥るべきものではない。爲に仲秋は板井原に陣したま、天授五年を送りて六年を迎へ、了俊もまた板井原の陣に来て、菊池諸城の通路を塞ぎ、糧道を絶ちて、遠くから次第に包圍する方略を取りました。そして四隣の形勢を熟察しつゝ、慎重の態度を以て、輕々しく兵を動かさず、天授六年も又暮れて弘和元年、今川氏は益々兵を集め菊池郡を包圍して四月二十二日には仲秋は木野城に對壘を構へ、頻に同城を攻撃しました。菊池氏は防戦大に努めましたが、遂に抗し得ず、二十六日には城は陥り吾平、河内また相前後して敵に犯されることになりました。仲秋は菊池の本據に侵入して菊池勢の防禦を破り五月十二日には本城に通つて攻撃益々急ぎなり、今や菊池氏の城壘は僅に武朝の據れる隈府本城と、良成親王の御在所である染土の二城となりました。仲秋は一たび板井原の陣に還つて更に戰備を整へ深堀、橋、安富等肥前勢の優秀なる者を選び、之を率ゐて六月十八日板井原を發し、先づ武朝の隈部城を攻撃すべく松尾に陣し、二十三日丑刻夜未だ明けず、一痕下弦の月天空にかゝり、曉露菊池の平野

を潤すの頃、吶喊して急に攻めかゝつたので、武朝支へ難く城は遂に陥つて了ひました。仲秋は直ちに今川五郎に良成親王の染土城を攻撃せしめました。時恰も天雨を降し風さへ加はつたので、親王は此の機に城を棄て、お遁れになりました。かくて天險を占めた菊池の諸城も天下の大勢には抗し難く、遂に敵手に落るに至つたのは是非もない、しかし斯る場合に於ても終始一貫して難局に當り、宗族一門一人叛者を出さなかつたのは、蓋し菊池氏の最も誇る所でありませう。

武朝の卒去

菊池肥後守武朝は南北合一後も足利氏の威勢に屈せず依然として九州に雄視して居ましたが、應永十四年病に罹り三月十八日四十五歳を一期として卒去されました。法號を神徳院殿玄微常期大居士と申します。

一八 兼 朝

武朝の長子兼朝は弘和三年に生れ没後父の菊池家第十八代を襲封し従四位の下肥後守に叙せられました。

兼朝の墓所は岡田の正善寺に在るとも云ひ、或は雪野の神徳寺に葬つたとも云ひ、其實不明であります。

一九 持 朝

永享三年菊池兼朝は守護職を退き長子持朝が之を繼いで従四位の下肥後の守に任ぜられました。永享十一年冬十一月少貳教頼は兵を擧げて叛しましたので持朝は城、赤星、隈部、原、木野、白石、八代等の一族郎黨を率ゐて筑前に進出し大内氏と連絡を取つて教頼を生松原に撃破し凱歌を揚げて菊池に歸りましたが、文安三年七月二十八日遂に卒去しました、時に年三十八歳で今片角の菊榮山善光寺に葬つてあります。

二〇 爲 邦

持朝の長子爲邦は永享二年に生れ幼名を犬丸と申して居ります、文安三年父の卒去によつて家を繼ぎ従四位の下に叙せられ隈府に居城しました、康正元年一揆起つて隈府城を圍み爲邦防いで危の時島津勝久の來援により、僅に降落を免れました事が菊池傳説に見えて居ります。

菊池氏の對外運動

康正元年爲邦の弟爲房は使を朝鮮に遣はし、翌二年爲邦も貿易を營み翌三年には八代の名和教信も貿易船を送り應仁元年にも菊池一族高瀬武教及び大橋政重も使を遣はしたことが彼の國の海東諸國記に見えて居ります。斯の如く菊池氏は懸軍の折にも常に對外運動を怠らなかつたのであります。

玉祥寺と碧巖寺

爲邦は幼少の頃寰中和尙の教音を受け後惠風に學び儒と禪とに通悟して居ました、享徳年間隈府に江月山玉祥寺を建て人吉永國寺實庭和尙の高弟竹庵仲少和尙を開山としました。文正元年卅七歳で肥後の守護職を嫡子重朝に譲り隈府城を退きて合志郡板井村龜尾の城麓水明の地を下して日夜碧巖集を講究し後居館を寺となして神龍山碧巖寺と稱し如拙伯巧和尙を迎へて開山としました。

二一重朝

菊池文學の由來

一、二十一代重朝公は肥後に身を起し十七歳で父の讓を受けました。生來勤王の志厚く王事に力むるに共に大に文學を奨勵し孔子廟を隈府に建て、所謂菊池文學の基を開かれたのであります。當時は天下亂麻の如く文學は地を掃はんとする時に際し私に隈部忠直と計り桂菴和當を招し以て菊池の里に燦たる光を放たてたのであります。

桂菴は應仁元年明に留學し七年の後文明五年歸國し重朝に召されて正觀寺に住はれました。同寺は興國五年元恢和尙の開山でありますが、武光公に召されてから元恢を添ふて京洛より來る者が多く殊に桂菴の文明年間は忠直を始め阿蘇の白石兵部、源基盛、僧月舟、玄叢雪溪等幾多の秀才輩出して儒學の黄金時代を作られたのであります。そして室町時代には九州文化の中心をなし、徳川時代には人材輩出して漢學界に貢献し維新の大業完成に際して薩長土肥の四藩が常に先驅となつて活躍されたのも大に故ある事と思はれます。尙南北朝以後にも菊池氏が獨り正忠を以て一貫し順逆の大義を誤らなかつたのも此文化の影頃偉大なりと云はねばなりません。

二、澁江家の興學

六四

又澁江家に代々碩學輩出して菊池文化の發達を助成したのも世人のよく知るところであります。澁江紫陽氏は幼少の時より好學の志厚く水足博泉、加々見鶴灘等に師事して遂に古學派を興されたもので當時武藝が盛んで文學は地を掃つて男子で書を持つ者は世人に笑はれた程で紫陽氏は家居し日暮をまつて山鹿郡分田村加々見氏の門に往復し五里の阪道を通學して刻苦勉勵遂に藩侯の教導師を命ぜられることになりました。晩年家塾を起し塾生三百にも達した程で後には藩廳の嘉賞にあづかり士班にまで列することが出来ました。

尙菊池正觀公(武光)墓所の荒廢を歎き隈府町の宗傳次氏と計つて神道碑を建てられし事など幾多の御功績を後世に残されました。

澁江家の養子松石氏も百家の學に涉り禮法を修め國學を嗜み和歌を學ばれましたが、最も地理に精通し菊池風土記、肥後郷名考等を著しました。門下には、龍淵、玄肅、伯順等幾多の秀才を出し肥後藩よりは櫻花章の羽織を賞せられ尙幕府の大學頭林家よりも敬意を表せられた程で其の菊池文學の興隆に對する御功績も又偉大なものがありました。

二三 能 運 (武運)

島 原 落

重朝の率去前菊池家では嫡子宮菊丸(武運)の配して相良長毎の嫡女を迎へんとし契約をすませましたが後婚儀を見合するに及んで相良家では菊池家の破約を口實として八代の豊福城に楯籠りまた。武運は肥後勢豊後の援軍を以て豊福に進入し日夜襲撃戰の結果相良方は多數の死者を出して敗軍となり爲續の逃れし八代をも陥落して了りました。

此時宇土爲光叛を圖りひそかに菊池の姦臣と共に文龜元年五月十三日武運が玉名の巡視中の留守に乗じて短兵急に隈府本城を陥れました。武運は直に肥筑の兵を従へて隈府に迫り王祥寺原に陣し翌二十日未明より猛烈な戰鬪を開始しましたが、菊池武運方では柱石も云ふべき重安以下千田、黒木、溝口等の勇將を始めとし數百の猛卒を失ひましたので、武運は身を以て玉名に走り舟に乗じて島原に渡り有馬家に依ることになりました。

文龜三年九月菊池家の老臣重峯及隈部運治等義兵を擧げて之を回復しましたが、其後能運は高瀬の

戦鬪に重傷を蒙り隈府に起臥して病勢がよくないので重安の長子政朝(後政隆)に譲り永正元年二月十五日二十五才を一期こして卒去されました。

米良の奥地へ

菊池武運が島原に落行く時嫡子重爲は一家臣に寄託せられて密に日向の米良山中に落ちのびました後長じて米良石見の守重次と名乗りました。そして實弟重治を養子とし其子重種は實弟重治を養子とし其子重鑑は弟重良を養子とし其子重隆は子重直に重直は又弟秀精に譲りました。其の子孫が則重、則信、則元、則純、則敦、則順、榮叔、忠、武臣を経て現男爵(菊池武夫)家こなつて居るのであります。

三三 政隆

能運卒去に際して肥後の守護職を政隆に譲るべく遺命しました、これは嫡子重爲が未だ幼少であるばかりでなく、米良の山中にあつて到底襲職の出来ないためと一は能運が政朝の祖父以来の経緯と歴史的餘哀が含まれて居たからであります。

そこで政朝は父重安の戦死以来其後を繼いで居ましたが、直に叔父重信の子重基に譲り、永正元年三月本家を相續して菊池第二十三代の太守となり年僅かに十四歳で肥後の守に任ぜられました。そして名を政隆と改めました。

阿蘇の嵐

人生の危険は山にしもならず水にしも非ず只人情反覆の間にあるのであります。能運の卒去後政隆の幼主なのを機こし阿蘇氏の菊池乗取に關する暗中飛躍は愈露骨こなつて來ました。

菊池家の元老重臣は阿蘇家の巧妙なる外交手段に籠絡せられ當主政隆に將帥の略なしと云つて遂に之を廢し阿蘇惟長を菊池に迎ふることに議決したのであります。然し政隆は能運の遺言によつて相續したもので又僅十五歳の若君に將帥の略なしの斷定は君意を無視するものであり實に言語同斷と云はぬばなりません、然かも惟長は菊池重朝と戦ひ之を屈辱せしめた阿蘇惟乗の子ではないか、時勢の推移とは云へ實に淺猿しき極みであります。

菊池、阿蘇兩家の交渉は纏りました、氣慨ある武士は頻に反對しましたが一夏の將に倒れんとする

よく一木の支へ得るところに非ず、永正二年十二月三日菊池家の重臣八十四名は最後の連判状を阿蘇家に送り當主政隆を追ひ惟長を迎へた惟長は菊池に來り肥後の守となり菊池武經と改稱しました。怖ぞや一陣の阿蘇風……名花將に散る……

久米原の戦

憐むべきは十五歳の政隆であります、菊池を追はれて暗雲に迷ふ孤雁の如く悄々として八代に赴き復仇を計りました。月日は流れて矢の如く永正六年となり八月玉名の櫻馬場に大友軍と戦つて捕へられ矢部に護送せられました。

永正六年八月十六日の月夜政隆主従匹馬肅々と合志軍田島と久米の莊との間道を護送される時舊臣玉屋三郎貞親手兵二百を以て突如切込んで政隆を奪還して久米の安國寺に陣營を張りました、急報限府に傳るや武經五百騎を以て久米原に着陣し、八月十七日己刻（午前十時）より猛烈な戦闘が開始せられましたが衆寡敵せず政隆は殘兵を集めて遂に安國に入り割腹し家臣も同じく此の薄命の君主に殉じたのであります。

二四 武包

傳統二十四代

永正二年十二月菊池家を横領した武經は性驕暴で一藩に嫌忌され政隆を殺した後は暴惡淫行甚だしく近臣の諫言をきかず逸樂を恣にしたので菊池家の老臣は素より國中悉く憤慨されるに至つたので永正八年武經も自ら危険を感じて遂に隈府を夜逃げし阿蘇の古巢へ舞ひ戻りました。

そこで菊池の老臣隈部親氏及長野武貞等相議して託磨武安の子武包を迎へて菊池の嗣君と仰ぎました。武包は幼名を宮松丸と云ひ隈府の本城に來て二十四代菊池氏系統最後の統領となりました。

此頃大友氏は菊池家の不振に乗じて之を乗取らんと企て菊池家の老臣を策して之を追ひ、自ら隈府城に打入つて肥後の守護と稱し名を菊池義宗と改めました、隈府を退いた武包は舊臣を糾合して玉名の筒嶽に楯籠りましたが阿蘇大友の連合軍に破れて島原へ逃れ天文元年二月十三日遂に果無き卒去を遂げられたのであります。

思へば延久二年初代則隆が肥後に入國して菊池氏を稱へてより武包の卒去に至る實に四百六十三年

是に菊池氏血統の守護は滅亡して霜に傲つた菊も凋んだのであります。

七〇

世人の多くは大友家より乗込める義武や宇土家よりの爲光或は阿蘇家より乗込める武經等を菊池氏の守護として加ふれ共著者は之等を代數より省き純菊池氏の系統二十四代を以て限定せり。

終始一貫の純忠

天授六年六月廿三日染土の城は敵手に移り、良成親王は武朝を隨へて「たけ」の山中へ隠れになりましたが、間もなく川尻、宇土兩氏の援助によつて宇土にお移りになりました。然し當時八代の名和氏や球磨の相良氏は、菊池氏の勢力の失つたのに乗じて、將軍宮を擁して事を起さうとし、朋黨を結びて武朝の排斥を謀りました、そして筑後の懐良親王及び吉野の後龜山天皇に讒訴しましたので、吉野の方でも勅使を遣はして尋問せしめました。そこで元中元年七月、武朝は長文の申狀を認めて、赤心を吐露し以て吉野の朝廷に具申しました。

今川貞臣(義範)は、肥後にあつて、専ら攻略經營に力め、次第に官軍の諸城を陥れて、元中七年には河尻、宇土の兩城をも陥れましたので、良成親王は菊池武朝を率ゐて八代にお退きになりました。

八代には、官軍名和顯興があるので、親王は之にお頼りになりましたが、元中八年、今川の軍八代の諸城を陥れたので、親王は已むなく八代の奥(高田御所ならん)にお避けになりました。武朝は菊池に歸りましたが、やがて親王は八代を遁れ出で、筑後矢部に遷り、五條頼治にお頼りになりました。武朝は、矢部の宮方と連絡をとつて、頻りに再興の策を講ぜられましたが、中央に於ては、元中九年、後龜山天皇が京都に還幸して、神器を後小松天皇にお傳へになりましたので、南北兩朝は茲に合一して應永元年、今川了俊は幕府の命によつて京都に召還され、新探題澁川滿頼が、應永三年博多に着きました。應永四年九月、武朝兵を擧げ、大内義弘の弟滿弘及び盛見と豊筑の間に戦つて、滿弘を八田に殺し、武朝は肥後に歸つて高瀬城に據りましたが、大友親世、澁川滿頼に攻められて、筑後に走りしました。九年、赤星氏又肥前に攻め入つて滿頼を破り、十年、武朝亦滿頼と千栗に戦ひ、大に新探題を惱しましたが、應永四年三月十八日、武朝は四十餘歳を一期として卒去しました。武朝は吉野朝衰運の時世に生れ、僅に十數歳の弱冠を以て、強敵今川了俊に對抗し、寂阿以來の家名を維持し後征西將軍ノ宮を奉じて忠節を盡し、苦戰奮闘、克く名聲を擧げ、倒れて後已むの誠を盡された其の功績は誠に偉大と云はねばなりません。明治四十四年、從三位を追贈せられました。

武朝卒して子兼朝後を継ぎ、持朝、爲邦と傳へました、爲邦の子重朝は、大友氏を攻めたことがありますが、其の子能運の時に、菊池氏の勢力衰へ、政隆、武包を経て、義武に至つて滅亡しました。

二、菊池神社記

別格官幣社菊池神社

一、社格

明治三年四月鎮座

明治六年五月郷社ニ列格

明治八年七月縣社ニ昇格

明治十一年一月別格官幣社ニ列セラル

二、祭神

贈從一位 菊池武時卿

贈從三位 菊池武重卿

贈從三位 菊池武光卿

配祀

贈從五位下 菊池武士朝臣

同 菊池武政卿

同 菊池武朝卿

同 菊池武敏卿

赤星有隆 菊池武村 菊池賴隆

菊池武安 菊池武明 赤星武貫

參見岡三河守 莊美作守

贈從四位宇都宮刑部丞 國分二郎

三、祭日

大祭 例祭 五月五日

新年祭 二月十七日

新嘗祭 十一月二十三日

下田帶刀

松田某

岩野某

鹿子木某

菊池降舜

菊池武吉

菊池武義

葉室高善

葉室善安

加屋兵武大輔

中 祭 歳旦祭(一月一日) 元始祭(一月三日)

紀元節祭(二月十一日) 天長節祭(四月廿九日)

秋祭(由緒祭)(十月五日)

小 祭 月次祭(毎月五日) 櫻祭(四月上旬) 武時卿正辰祭(五月四日)

武士朝臣正辰祭(五月十七日) 鎮座祭(五月十七日)

武政卿正辰祭(八月十二日) 武重卿正辰祭(九月二十二日)

武光大神正辰祭(十二月廿日) 除夜祭(十二月卅一日)

祭神及累代の御墳墓

- 一 武時卿 福岡縣早良郡原村大字七隈(福岡市ヨリ二里)
- 二 武重卿 菊池郡隈府町大字隈府字亘(東福寺東約五町)
- 三 武光卿 菊池郡隈府町大字隈府字正觀寺(正觀寺境内)
- 四 武政卿 右同所

- 五 武士朝臣 葦北郡二見村正福寺境内
- 六 武朝卿 武敏卿 武房卿 (末祥)
- 七 重朝朝臣 菊池郡隈府町大字隈府玉祥寺境内
- 九 則隆朝臣 菊池村大字深川菊の池畔
- 〇 經隆朝臣 花房村大字出田若宮靈社
- 二 兼朝朝臣 岩村岡田正善寺境内
- 三 持朝朝臣 隈府町片角光善寺境内
- 三 爲邦朝臣 隈府町玉祥寺境内
- 四 重朝朝臣 隈府町玉祥寺境内
- 五 能運朝臣 隈府町正觀寺境内
- 六 政隆朝臣 泗水村久米安國寺境内

菊池氏の同姓異氏

五百年に亘る菊池氏の當主は二十四代であります但其の兄弟は六十餘人もあり其の人々の子孫は數十家に分れて全國各所に散らばつて居ります。これらは菊池氏其儘を稱する者もあり又異氏を稱するものもあつて

西郷	小島	山鹿	兵藤	合志	迫間	天草	藤田	託磨	長坂	出田
村田	井芹	莊	立田	佐野	東	赤星	永野	砥川	八代	黒木
片角	江良	伊倉	九條	林原	蛇塚	方保田	平山	小野	加惠	城
本郷	中山	若宮	須屋	堀川	甲斐	長瀬	島崎	重富	木野	豊田
高瀬	深川	西	千田	新宮	宇土	米良	小名	中武	田爪	濱沙
小河	肥木田	山崎	大坪	高倉	武田	村井	廣瀬	紀伊	高橋	永里
岡本	石坂	福本	原	小山	益城	小野崎	肥後	林	菱沼	栖本
志岐	俣江	兼松	大木	菊地						

等八拾餘家をも數えられる、尙一族郎黨の氏名を記したものは嘉吉三年正月持朝の侍付一百十六人、文明十三年八月連歌會の一百人、永正二年十二月連判帳の八十四人等が残つて居ります。

三、菊池の史跡

官軍墓

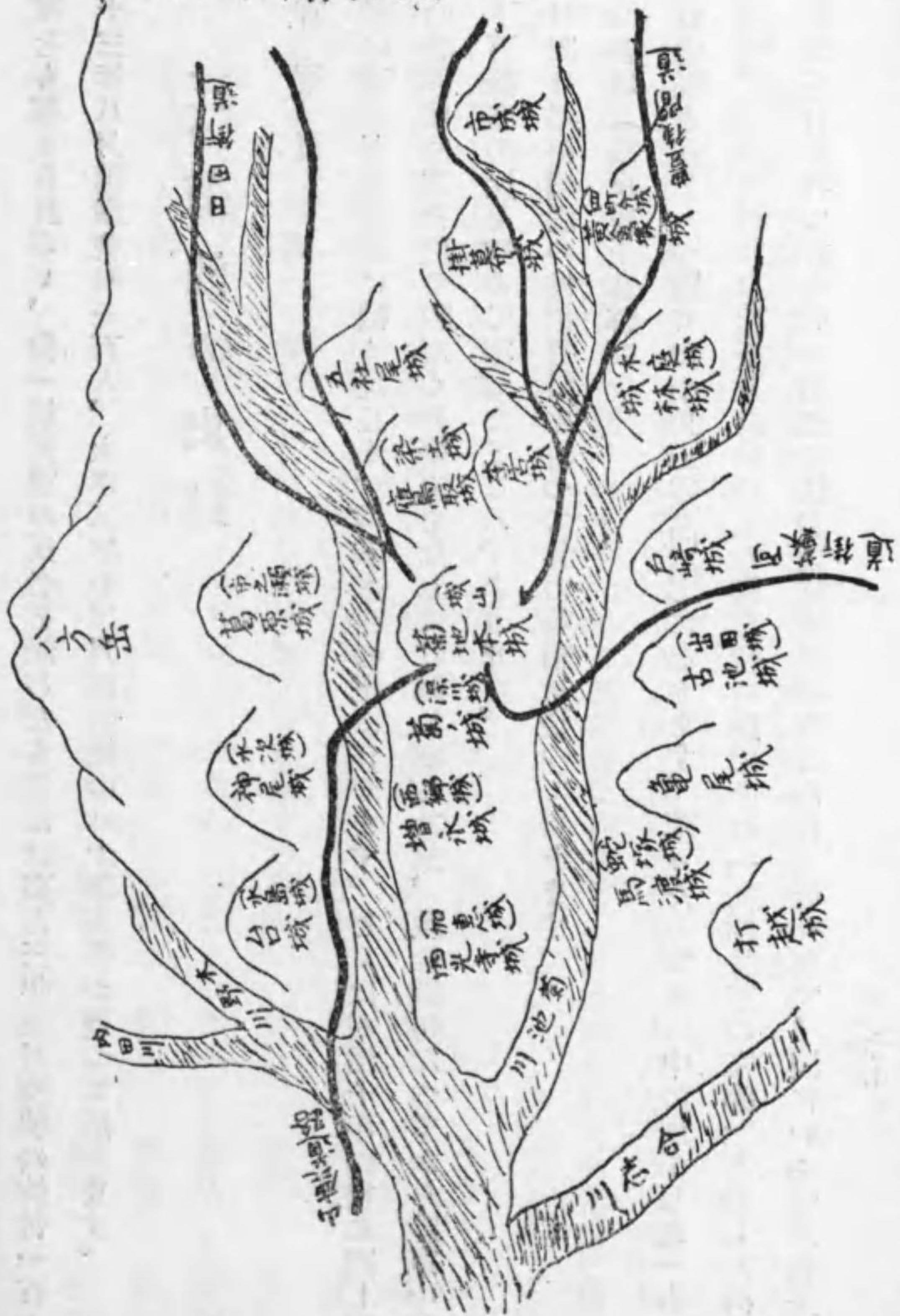
菊池神社の東南月見御殿に續く連丘上、櫻萩叢生の中に在ります。こゝは明治十年の役に際し向坂鳥巢方面の官軍は味方を顧る暇なく死傷算をなして敗退しましたが、戦後數句たつてから陸軍中將横山友實以下百餘名の屍を收めて葬つたところでありませう。

毎年四月四日櫻花爛漫の候招魂祭を行つて其の英靈を祭つて居ります。

内裏尾(懷良親王宮跡)

菊池神社の後方谷を一つ隔てた小丘上(茶臼山)にあります。藁々たる繁みの中に削平した一小區こゝが吉野朝時代征西將軍懷良親王及良成親王の御當留の跡である「征西將軍の宮跡」と刻した碑は文政八年五月廿五日に建てたもので菊池の儒者葉室黃華の筆に申して居ります。因にいふ懷良親王の征

菊池十外城略圖



西將軍に任せられ給ふたのは延元元年九月まだ武重公が叡山の行在所に在つた頃で隈府へ御入城遊ばしたのは正平三年正月で武光公の時であります。

月見殿跡

隈府城の一角(二の丸)熊耳山の丘上にありまして前面には菊池平野遠く連り東方に鞍岳西方は有明海海を隔て、遠く雲仙の勝景を一瞬に集むる眺望の地で懐良親王御在城の頃御殿を茲に設け屢々月見の宴を催して御旅情を慰め奉つたところであります、當時は十尋園の大裏杉二本ありましたが一本は枯れ一本は寶曆年間火事にかゝつて失せましたので後澁江松石及正觀寺和尚等が五本を植えつぎましたが今は僅に一本だけが残つて居ります。

先年熊本縣下に於て行はれたる陸軍特別大演習に際し長くも大元帥陛下におかせられては十一月十二日親しく此地に於て御統監を召させ給ひました。地方民は此榮譽を記念するの意味に於て大元帥陛下駐蹕之處と題する記念碑が設けられました。

孔子堂の址

隈府町字高の瀬の田浦の中にあります。こゝは二十一代菊池重朝公が父邦と計り文明九年二月聖堂

を建て、孔子の像及十哲像を祭つたところで實に菊池文教の淵源地になつて居ります。

其當時は天下亂麻の如く亂れて文教地を拂ふの時でありましたが菊池氏が獨り此の里に學問を起して西海文教の府となされたのは實に千古の美事と云はねばなりません。世の諸豪が往々にして本末を誤るの時菊池氏が獨り大義を明にし終始一貫忠勤を勵まれたのは故有るこゝ思はれます、惜いかな寛文二年菊池氏没落後遂に破壊されました。俗間には孔子堂と呼んで居ますが現在の碑は文政八年に建てたもので、中島氏の建てられたものと並立させてあります。

神軍木、松囃子

玉垣の中にある神木は征西將軍の宮の御手植の神木で圍九〇九種に達し、もう既に五〇〇年を経ても木精尙衰へず益々神靈を發揮して居ります。樹下には祭壇があります。

正面の能場は毎年(十月十五日)菊池神社大祭の日神輿を安じて菊池氏傳來の松囃猿樂を催します、松囃は天下太平安全の祈禱祭で菊池氏が毎年正月城内で行つて居たものでありましたが後出陣に際し興行を怠り凱旋の後七月十五日に行ひ現在は九月十五日に行ふやうになつたのであります、現今の舞台は寛政八年に建設したもので此神事を怠る時は火難が多いと云ふので菊池氏没落後も今尙残つて居

ります。

隈部忠直の墓

孔子堂跡から迫川の對岸に杉掠樟の小森の下にありますこゝは上總介忠直の墓所で里俗に誤つてタダノブと呼んで居ります。

忠直公は應永三十三年五月三日の午の年午の日午の刻に生れたかたで母は菊池氏の女で十七歳の時結婚し忠直を産んで翌年正月二日に十八歳で去りました。忠直は至孝至誠、文武兼備の名將で重朝公以下氏の三代に忠勤を盡して所謂菊池文學の黄金時代を作られた人であります。

生來孝心厚く殊に午の刻に生れたのに因んで自ら馬頭觀音を刻み、光九寺を建て、迫村に祭り長録三年母の三十三年忌に際しては法華經六萬字を一字一石に手寫してこれを埋葬したと傳へられて居ります。

菊の池

菊池村字深川にありまして道をへだて、則隆公の墓に對して居ります。古の大池で其の形は菊花の如く圓く池邊一帶には紅白爛漫とし菊花亂れ咲きしに因んで則隆公菊の池と命名されました。古は水

漫々として如何なる旱魃の時にも涸れることなく卻中を灌漑して居ました。現在菊之池の三字を刻した石碑があります。池周には雑草竹林繁茂するも決して竹根侵入することなく又池中に蛙の聲を聞くことがないと云はれて居ります。

駄護地蔵

菊池村深川にありまして浄土宗に屬し本尊は地藏菩薩で牛馬の守護神として遠近よりの參詣者が多くあります。殊に一月四日は郡内各地より牛馬を引いて參詣します。

里俗の説にこゝは元菊池氏の馬屋別當某の墓所で其の上に堂を建て、地藏を祝つたものでありまして堂前には今尙馬の船云ひ傳へて長六尺巾三尺程の石鉢が残つて居ります。

堂山金比羅神社

金比羅神社は輪足山の山腹に在ります。其の昔は松樹の中に御神体を安置してありましたが或年香火の燃えうつるところとなつて遂に枯死して了ひました。後明治十二年社殿を建築して十三年四月立山耕雲氏の發起によつて遷宮式を行ひました。現今も四月十日の例祭には櫻の頃とて一入賑ひます。

北宮神社

菊池川の清き流の邊り老樟の茂みの間に鎮座在す北宮神社は後龜山天皇の天授四年八月十七代菊池武朝公が阿蘇の北の宮を勸請されたものであります。本社は郷社ではありますが古來本郡の鎮護の神として遠近の崇敬厚く毎年九月九日の大祭には數千の參詣者があります。

元々本社には數多の寶物がありました。天正七年三月薩州軍侵入の時社殿は焼失され錦旗以下寶物も多く掠奪されて了ひました。現在残つて居るものは征西將軍の宮御寄進の軍配圍扇のみで此の軍配は横六寸八分、縦六寸二分、地は革で、柄は竹を藤で巻き、表は金に朱の日の丸、裏は革地に金の日の丸で、先年大演習の際長くも聖上陛下の臺覽を賜はられた本社唯一の寶物であります。

尙正面にある樓門は縦一丈九尺三寸、横五尺八寸、赤塗丸葺の古築で五百年前の物と傳へられて居ります。

熊耳山正觀寺

正觀寺は菊池氏の氏寺で興國五年菊池武光公の建立に成り當時は寺領六十六町歩を有する巨刹で五山の上に置かれてありました。當寺の開山は京都建仁寺の榮西光國師の法孫、元恢和尚であります。元快は武時公が戦死するや其子武光を聖福寺に忍ばせ後日之を菊池に護送せる傑僧で武光公にとつ

ては實に命の恩人であります。仍て襲封の後本寺を建て之を招きました。此寺は菊池家の全盛時代最繁昌せる巨刹で碩學高僧多く輩出して菊池文化に貢献せること偉大で名畫古文昔も今尙存在して居ります。後菊池家衰退して大友家支配の時寺領を沒收され、天正十五年佐々成政攻落によつて僧徒は散逸しましたが加藤氏領するに及んで寺領高十二石五斗を給せられました。

江月山玉祥寺

玉祥寺は隈府町大字玉祥寺に在る曹洞宗の禪寺であります。此の寺は球磨郡永圓寺の末寺で菊池爲邦の建立に成り正觀寺と共に菊池氏の菩提寺であります。本尊は安阿彌の作になる勢至菩薩を安置してあります。但其後失火の爲め焼失して了ひました。現在四百七十年を經過して居ります。院内には菊池爲邦同重朝の墓があります。

菊池五山

菊池五山は西征將軍懷良親王の命により十五代菊池武光公が定められたものであります。

一 輪足山東福寺

東福寺は亘の山腹眺望の地に在つて天台宗に屬して居ります。此寺は澄慶法師の開基に成り叡山の

末寺とも云ふ可きもので行基菩薩の作と傳へられて居る千手觀音を本尊として居ります。寶物には來潮の作なる懷良親王の御尙像があります。

毎年が八月一日が千燈籠と云つて遠近參詣者で賑ひます。

二 無量山西福寺

西福寺は菊池村字西寺に在りまして本尊は阿彌陀如來で和銅二年の開基と傳へられて居ります。其背後には赤星有隆城武峯の噴墓があります。

三 手水山南福寺

南福寺は花房村大字出田に在ります。此寺は元々天台宗でありましたが廢寺の後武光公が再興して五山の一に加へられました。本尊は藥師加來で其後荒廢し今は僅に草堂のみが残つて居ります。

四 袈裟尾山北福寺

隈府町大字袈裟尾にあつて初めは永福寺と云つて居りました。此寺は天臺宗の巨刹で弘仁年中に傳教大師の開基と傳へられて居ります。

上宮には同大師の作に成る大同如來を本尊とし鎮守は山王七社を勸請し中堂には一刀三休の藥師

並に十二神を調刻し山下に十二坊を建て、ありました、そして祈禱料千貫寺領千石を賜つた此の巨利も一時廢蹟し後菊地武光公によつて北福時と改稱されたのであります晨昏梵鐘耳に満ちて無明の暗を覺し、眞如の月朗にして座禪の狀を昭せしも世換り星遷り殆廢頽して僅に小庵を残し住昔の殘燈を點するのみであります

五九儀山大琳寺

菊池村大字大琳寺に在りまして本尊は六臂の觀世音を安置してあります本寺も後世幾度かの改修を経て現今の瓦葺堂は明治三十四年改築されたものであります。

尙其他に上町の廣現寺、立町の妙蓮寺及び檀林寺井手端の西照寺、立石の西覺寺及安樂庵、亘の光満寺等由緒深き幾多の古刹があります。

四、菊池氏系圖

(一) 中臣氏系圖

天兒屋根命—天種子命—(十二代略)—鎌子—勝海
—黑田—(二代略)—御食子—鎌足(藤原氏祖)

(二) 藤原氏系圖

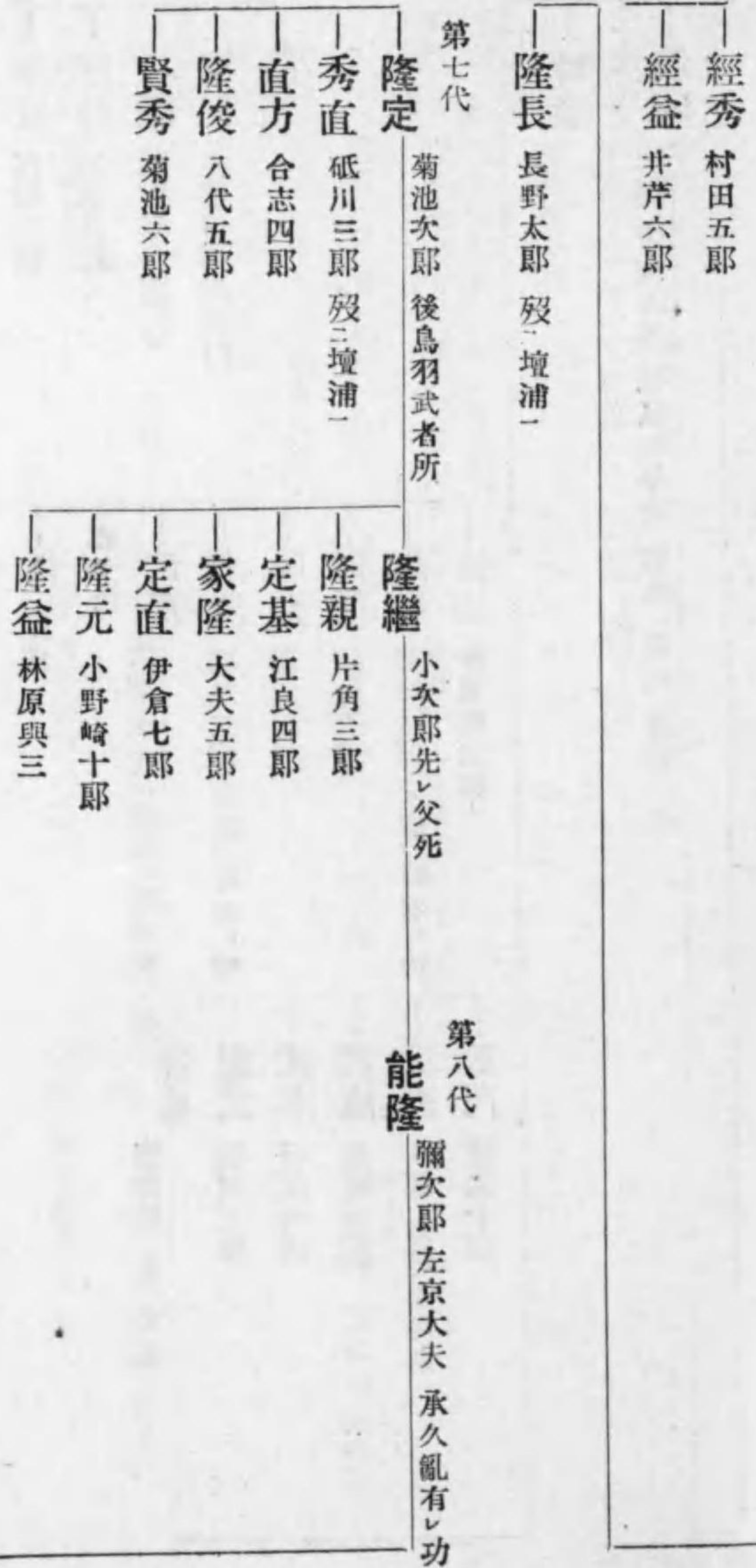
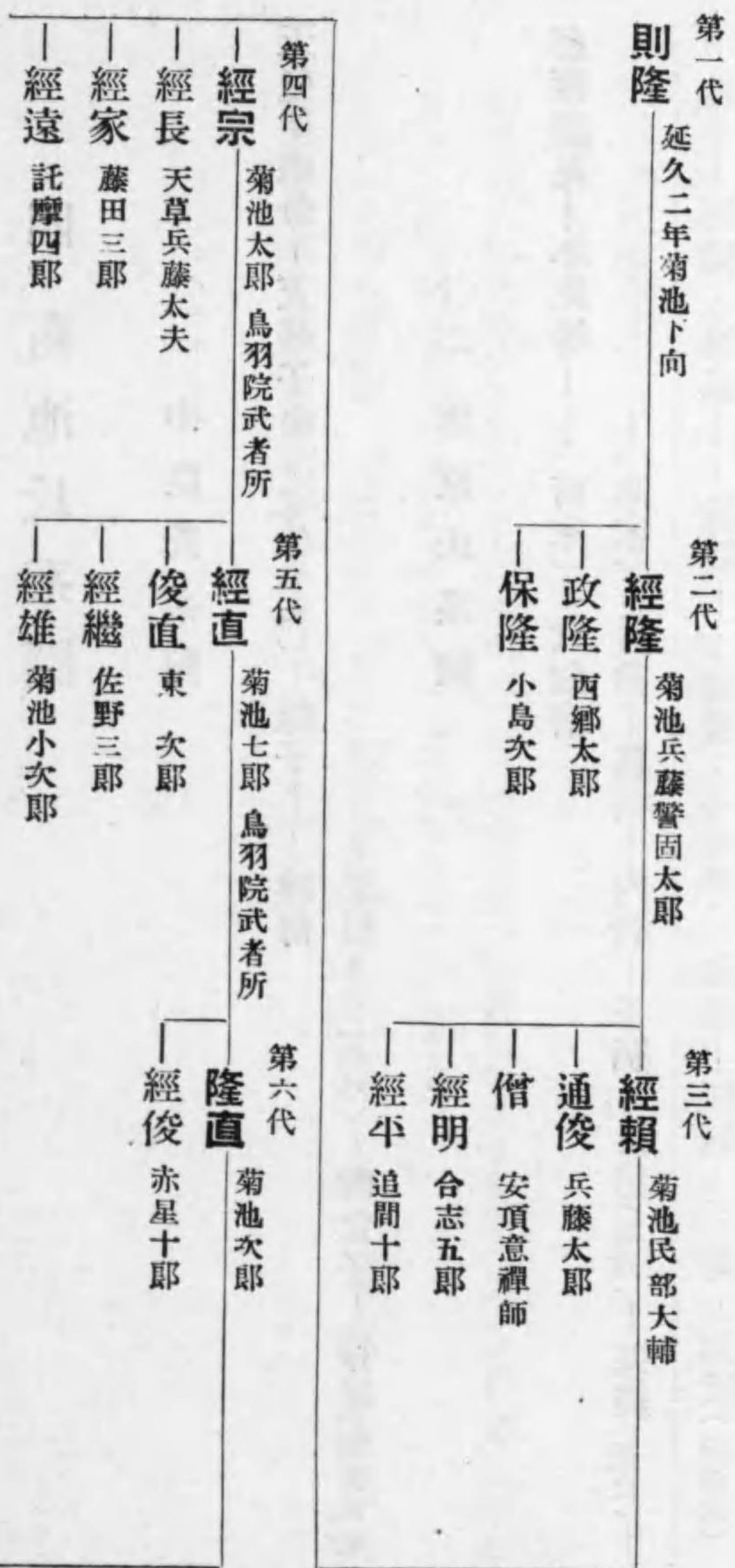
藤原鎌足—不比等—

(南家)—武知磨
(北家)—房前—眞楯—内磨—冬嗣—良房(攝政)—基經(關白)—

忠平—師輔—兼家—道隆—隆家(太宰權帥)—良賴—經輔—正則—則隆(菊池氏)

—道長—文時—文貞—秀平(龍造寺)

(三) 菊池氏系圖



第九代
 隆泰 太耶式部少輔
 隆政 西郷三郎
 隆時 加惠九郎
 隆經 城六郎 越前守
 實照 本郷四郎左衛門
 隆頼

直隆 刑部丞 早世
 僧 覺佛

第十代
 武房 次郎 元寇ノ時有レ功 贈從三位
 有隆 赤星三郎 元寇ノ時有レ功
 隆顯 若宮四郎
 隆冬 須屋五郎
 康成 菊池八郎 元寇ノ時有レ功
 重宗 林原與三郎

隆盛 彌四郎 先レ父死
 道武 堀川三郎
 武本 甲斐六郎
 武成 長瀬七郎
 武經 八郎 島崎左馬助
 武門 迫間十郎

十一代 時隆
 十二代 武時

次郎 寂阿入道 元弘三年於三博多一戰死 贈從一位

第十三代

武重 次郎 肥後守 贈從三位
 頼隆 肥後三郎 從レ父戰死
 武茂 木野對馬守
 隆舜 大圓寺阿日坊 從レ父戰死
 武澄 菊池肥前守 從五位下
 武吉 菊池七郎 於三湊河一戰死
 武豊 菊池八郎 赤星筑前入道
 武敏 菊池九郎 掃部助 空阿入道 贈從三位
 第十五代 武光 豐田十郎 肥後守 贈從三位
 武隆 菊池與一
 第十四代 武士 又次郎 肥後守 從五位下
 武尙 肥後守

武安 肥前守 於三筑前蟻打一戰死
 武元 守武 安春

第二十四代
 武安 武包 宮松丸 肥後守

第十六代
 武政 次郎 肥前守 贈從三位
 良政 又次郎

第十七代
 武朝 加賀丸 肥後守 贈從三位
 兼秋 西左馬助

武義 菊池彦次郎 自關入道 於三筑前蟻打一戰死

第十八代

兼朝 肥後守 從四位下

武楯 高瀬相摸守

英朝 千田伊豫守

第十九代

持朝 肥後守 從四位下

忠親 新宮次郎

第二十代

爲邦 犬丸 肥後守 從五位下

第二十一代

重朝 藤菊丸 肥後守 從四位下

武邦 民部允

第二十二代

能運 宮菊丸 武運 肥後守 從五位下

第二十三代

政隆 始の名は政朝 肥後守

爲安 肥前守

爲房 託磨大膳大夫

爲光 宇土彈正大弼

相直 木野但馬守

重次

第卅九代

忠 爲菊池神社宮司

第四十代

武臣 賜男爵

武夫

五、菊池氏年表

五、菊池氏年表

<p>武義 菊池彦次郎 自關入道 於筑前蟻打戰死</p>	<p>第十八代 肥後守 從四位下</p>	<p>第十九代 肥後守 從四位下</p>	<p>第二十代 犬丸 肥後守 從五位下</p>	<p>第二十一代 藤菊丸 肥後守 從四位下</p>	<p>第二十二代 宮菊丸 武運 肥後守 從五位下</p>
<p>英朝 千田伊豫守</p>	<p>武朝 高瀬相摸守</p>	<p>持朝</p>	<p>爲邦</p>	<p>重朝</p>	<p>能運</p>
<p>爲安 肥前守</p>	<p>爲房 託磨大膳大夫</p>	<p>忠親 新宮次郎</p>	<p>爲安 肥前守</p>	<p>武邦 民部允</p>	<p>政隆 始の名は政朝 肥後守</p>
<p>爲光 宇土彈正大弼</p>	<p>相直 木野俱馬守</p>	<p>重次</p>	<p>重安 肥前守</p>	<p>第十九代 爲菊池神社宮司</p>	<p>第四十代 武臣 賜男爵</p>
					<p>武夫</p>

白河 (72)	後三條 (71)	後一條 (68)	三條 (67)	皇室
承暦三二保五四三	承二	延久二	寛仁三	執政者元
一七三六	一七三五	一七三二	一七三〇	號紀元
一七三七	一七三六	一七三三	一七三一	
一七三八	一七三七	一七三三	一七三二	
<p>藤原隆家太宰權帥ニ任セラレ—三十六歳(三、二)</p> <p>藤原隆家刀伊ノ賊ヲ撃退ス(三、三)</p> <p>藤原則隆肥後ノ警固使トシテ菊池郡ニ下向シ深川村ニ居館、初代菊池氏ヲ名乗ル</p> <p>隆家(太宰權卒)—良頼—經輔—正則—則隆(菊池氏)</p> <p>文時—文貞—秀平(龍造寺)</p> <p>良房(攝政)—基經(關白)—中平—師輔—兼家—道隆—道長</p> <p>藤原鎌足—不比等—(南家)—武知麿—(北家)—房前—眞楯—内麿—冬嗣</p>				中央政局
攝關時代	記録書ヲ置キ莊園ヲ調査ス			

崇 德 (75)	鳥 羽 (74)
----------------	----------------

長天 大天 保元 永 天 大 嘉
 承承 五 四 三 二 治 二 治 四 三 二 安 二 永 五 四 三 二 久 二 三 永 二 仁 二 永
 一七九二 一七九〇 一七八九 一七八八 一七八七 一七八六 一七八五 一七八四 一七八三 一七八二 一七八一 一七八〇 一七七九 一七七八 一七七七 一七七六 一七七五 一七七四 一七七三 一七七二 一七七一 一七七〇 一七六九 一七六八 一七六七

大地削成白象牙。
 普賢毛孔出山河。
 重々示現神通力。
 粉碎虛空兩雜花。

堀 河 (73)	
----------------	--

(政院) 皇 上 河 白 實 師 原 藤
 長 康 承 永 嘉 寬 應 永
 二 治 五 四 三 二 和 二 德 長 二 保 七 六 五 四 三 二 治 三 二 德 三 二 保 四 三
 一七六四 一七六三 一七六二 一七六一 一七六〇 一七五九 一七五八 一七五七 一七五六 一七五五 一七五四 一七五三 一七五二 一七五一 一七五〇 一七四九 一七四八 一七四七 一七四六 一七四五 一七四四 一七四三 一七四二 一七四一 一七四〇 一七三九

雪中示寂山
 一夜庭前三尺雪。
 寒威徹骨立人稀。
 小林斷臂得髓旨。
 只許持身來者知。

安 德 (81)	高 倉 (80)	六 條 (79)	二 條 (78)
----------------	----------------	----------------	----------------

盛清平 (政院) 皇上河白後

壽養	治安	承嘉	仁永	長應
永和	承元	安應	萬安	保曆
一八四二	一八三二	一八二二	一八一五	一八〇〇

八月隆直頼朝ニ應シ太宰府ニ討入リテ之ヲ燒ク

源頼朝
倉ニ擧兵

後白河 (77)	近衛 (76)
-------------	------------

(政院) 皇上羽鳥

平保久	仁久	天康	永保
治三	元二	壽三	平六
一八八九	一八七六	一八六五	一八五三

袖ふれし花も昔を忘れずば
我が墨染を哀とは見よ

詠武士

保元ノ亂
平治ノ亂

後奈良
(105)

(三) 晴 義 利 足 | (任重) 植 義 利 足

天	享	大
文	祿	永
四三二	七六五四三二	七六五四三二〇九八
二二二二二二二二二二	二二二二二二二二二二	二二二二二二二二二二
九九九九九九九九	九九九九九九九九	九九九九九九九九
九四三二	〇九八七六五	八七六五四三二

大友重治限府城ヲ落シテ武包ヲ追フ
重治名ヲ菊池義宗ト改メテ茲ニ居城ス

菊池武包島原ニ卒去ス(元二、三)菊池氏ノ回復遂ニ成ラズ
延久二年則隆入國ヨリ四百六十二年ニシテ守護家滅亡ス
大友義宗(菊池ニ入リテ菊池義武ト稱セシガ)限府ヲ去ル
大友義宗ヨリ乘込メル義武、宇土家ヨリノ爲光、阿蘇家ヨリノ武經
モ本表ニハ大友家ヨリテ代數ヨリ除外シ菊池氏正統ノミナ二十四代トセリ

南部一向
寺ヲ揆興福
ヲ燒ク

昭和八年五月一日印刷
昭和八年五月十日發行

編輯兼 發行 熊本縣立菊池高等女學校々友會

印刷者 熊本市昇町三番地 松 岡 重 喜

印刷所 熊本市昇町三番地 大同印刷株式會社

終

